陶工・諏訪蘇山

木村弘道

序

諏訪蘇山は明治・大正期に活躍した陶工として有名である。しかし，この時代は終つてから，まだ数十年しかたつておらず，客観的に評価するには歴史的時間があまりにも少ないこともあつて，その研究は低調であつた。

近年明治時代が再評価されつつあり，諏訪蘇山も昭和四十二年九月二十三日から十月二十二日まで，京都国立近代美術館において「近代日本の工芸」また，同年十月二十九日より十一月二十六日まで，京都市美術館における特別展「京都の美術工芸百年」等の展覧会に，それぞれ作品が陳列され，比較研究される機会もあり，その展覧会の図録には「略歴」や「小伝」も紹介されている。「京都の美術工芸百年」展の図録では，「明治から大正にかけてのわが国の代表的な陶芸家の一人である」と，その評価は高まりつつある。

しかし，蘇山の本格的研究は多くの問題を今後に残している。本稿は主に諏訪家所蔵の資料によりまとめたものである。

資　料

蘇山研究の主な資料には多数の遺作品の他に次の如きものがある。

1. 金沢市役所の除籍の原本。
2. 京都市役所の除籍の原本。
3. 金沢市笹ケ町興徳寺の過去帳。
4. 大正十二年二月の小祥忌薦事のおり作つた写真帳で，鉄斎が「風雅遺範」と題している。
5. 蘇山遺作品展覧会編，芸艸堂発行の「蘇山之陶器」という図録で，村上文芽修の「諏訪蘇山略年譜」が附してある。
6. 十三回忌のおり作成した図録「蘇山賸影」で擇堂木邨得善譔の「諏訪蘇山君小傳」

と「君ノ逸事ト藝術」の文がつけてある。

7. 諏訪家所蔵の文書等。

しかし「風雅遺範」「蘇山之陶器」「蘇山賸影」はいずれも私家版で市販はされなかつたもので，各々次の緒言や序文がついている。

緒　言

先考蘇山ノ小祥忌辰薦事ヲ建仁寺僧堂ニ修スルニ當リ細木松之介，富岡鉄齋，大谷尊由，小幡茂，賀屋隆吉，佐伯理一郎，木村得善ノ諸賢胥謀リ月ノ八，九両日ヲトシ同寺中両足院禪居庵ニ於テ追薦遺作展覽会ヲ催サレ蒐集スル所ノモノ壯年時代ヨリ中年晩年ノ作ニ至ルマデ其餘技ニ係ルモノヲ合シテ无慮三百ニ達シ展列ノ後壁ニハ遺愛ノ書画ヲ掲ゲリ別ニ壇ヲ設ケ靈ヲ祭リ又煎茶抹茶ノ二席ヲ開キ遺作ノ文房具並ニ茶器ヲ用ヰ亦遺愛品ヲ以テ室内ヲ裝ヒ幽趣禪味併セテ掬スベシ如是ニシテ遠近同好諸彦ノ清遊雅鑒ニ供セラレタリ感荷曷ンゾ禁ヘン先考泉下ノ喜ビ知ルベキノミ於是悉ク之ヲ撮影シテ一帖ト為シ以テ永ク其隆情ヲ記念セムト欲スト云爾

大正十二年癸亥之春二月

蘇山諏訪虎子識

序

蘇山が青磁乎，青磁が蘇山乎，蘇山の生命は青磁に在り，青磁は蘇山によつて再生をした。蘇山が帝室技藝員の榮を辱ふしたのは実に三十有餘年間の推究に七官青磁の古窯法に悟入したが爲めである。蘇山は隠れたる名工であつた五十七歳五條坂に自營するに及び稍世間に認められたが其名は與平，竹泉，六兵衛には遠く及ばなかつた，與平歿して四年突如として其缺を補ふべく帝室技藝員の命を下さるゝや，世人は初めて蘇山の上に眼覺めた，此時蘇山は六十七歳の高齢である。蘇山は如斯青磁に生きたるも熾烈なる研究慾は決して是に滿足をせぬ，彩釉に白高麗に三島に交趾に陶器の全種類に亘つて考窮製作して遂げざるはなかつた。蓋し蘇山は老陶工にして又実に理化の篤学者だからである。従つて其餘技たる漆器彫刻，織物の其総てが亦専門家の疊を摩したのである。洵に陶工として近古の名人と言はねばならぬ。今月八日一周忌薦事の行はるゝやその友人細木松之助，富岡鉄齋，大谷尊由，小幡茂，賀屋隆吉，佐伯理一郎，木村得善の七氏秘藏の遺作を八，九両日建仁寺禪居庵に展觀して追念の意を表した。蒐まるもの約三百點其中の粹を抜き撮影したのが本書である。色調釉澤は之を傳ふるに由なしと雖，亦以て蘇山の藝術を彷彿たらしむ

るに足るを信ずるのである。

大正癸亥二月　　村　上　文　芽

緒　　言

先考逝テ茲ニ二十三回忌辰薦事ヲ修ムルニ當リ曩ニ木村擇堂先生ノ敍述ニ係ル小傳ニ印譜ヲ附シ且昨春萬松寺不識庵ニ於テ茶醼ヲ設ケ先考妣ノ靈ヲ慰シ傍ラ遺作品數十點ヲ陳展シテ其撮影シタルモノヽ一斑ヲモ茲ニ收冊シテ聊カ記念ニ供セントス大方諸賢幸ニ淸暇電覽迫懷ニ資セラルヽヲ得ハ泉下ノ喜ヒ固ヨリ大ナルヘク不肖ノ微意亦之ニ過クルハ莫シト云爾

昭和九年二月

不　肖　　蘇山諏訪虎子　謹白

家　　系

諏訪蘇山は諱を好武といい，嘉永四年五月二十五日父重左衛門と母「亞ん」の長男に生れ，父母ともに家は世々加賀藩士であつた。父の諱は好方すなわち重左衛門好方といつていたそうである。父の生年月日は詳かでないが，金沢市笹ケ町の菩提寺である興徳寺の過去帳には，「文久三年七月三十日，淸閑院好方日行居士重左衛門」となつている。

母は「亞ん」といい，渡辺与左衛門の二女，天保元年九月二十二日生れで，金沢市の戸籍原本には「嘉永元年二月八日石川縣金澤區鷹通町士族渡邊與左ヱ門二女入籍・明治二十九年五月五日死亡」とある。

蘇山は次の三人兄弟の長男であつた。

長男　好武　嘉永四年五月二十五日生

二男　好直　安政元年八月九日生

長女　ゑぞ　文久二年十月二十七日生

蘇山には子が一人あり，金沢市の戸籍原本には「長男・好精・明治十六年生・大正元年十二月三十一日午後十時三十分死亡」とある。

蘇山は長男の好精が死亡し後に子がなかつたので，自分の弟好直の二女の虎子を養女にした。この虎子が二代蘇山で現在も盛んに活躍している。虎子は，好直とその妻「ゑう」の二女で，金沢市の戸籍原本には「明治二十三年五月三十一日生」「戸主諏訪好武同人妻ゑ美ト養子縁組届出大正五年三月二十三日」となつている。

略　　歴

諏訪蘇山は嘉永四年五月二十五日に，加賀藩士であつた父の諏訪重左衛門と，母「亞ん」の長男に生れた。

出生地は加賀国金沢馬場六番町，現在の石川県金沢市小橋町といわれているが，金沢市役所の戸籍の原本では，馬場六番町で出生したことを証する事項は見あたらない。しかし，明治の初め頃に蘇山は馬場壱番丁拾五番地ノ一拾六番地ノ二合併に住し，その後，石浦町拾五番地ノ二拾六番地ノ二合併に移つたとなつている。

次に蘇山の事跡を年譜的に列挙すれば次の如くである。

文久三年〔十三歳〕七月三十日父を喪い，以後兄弟三人とともに母の訓育を受ける。

元治元年〔十四歳〕剣道・馬術・水練術の免許を得，実質的に家督を相続したという。

当時の状況について「蘇山賸影」の「諏訪蘇山君小傳」には次の如く書いてある。

「君幼ニシテ父ヲ喪ヒ弟妹アリ兄弟三人母ノ鞠育ヲ受ク母時ニ年三十三親戚故舊ノ再婚ヲ勸ムルアルモ儼トシテ聽カス曰ク妾二夫ニ見ユルノ意ナシ家道非ナリト雖モ榮枯ハ世ノ常ナリ憂フルニ足ラズ唯三子ノ成育ヲ待ツアルノミト藩制ニ男子十四歳ニ至ラサレハ家名ヲ續ク能ハス而テ武藝ノ免許ヲ得サレハ家督ヲ續ク能ハス故ヲ以テ君一意武藝ヲ學ヒ十四歳ニ至リテ劍道馬術水練術三藝ノ免許ヲ得タリ於是始メテ家道稍裕ナルニ至ル抑今日ニ至ルノ間母ノ萬難ヲ排シテ君ヲ激勵シタルハ數年ノ間一日ノ如ク須臾モ意ヲ安ンスルナシ手工ニ依リテ親子四人ヲ糊シ身襤褸ヲ纏ヒ祁寒ノ候猶且單衣ヲ着クルモ恬トシテ顧ミス如此僅カニ飢寒ヲ支フルモ慈愛ト教訓トニハ最モ神ヲ費セリ例之ハ年々嚴寒ニハ後庭雪ノ上ニ藁莚ヲ敷キ君ヲ端坐セシムルコト連朝二時間ニシテ雪解ケ腰没スルニ至レハ障子ヲ開キ休息ヲ命ス君室ニ入レハ監視中ニ燒炙シタル數枚ノ餅ヲ與ヘラル蓋シ耐忍ヲ訓錬セシムルノ意ナラン母後年老テ病ニ罹リ呻吟累旬ニ及ヘリ一日三子ヲ枕頭ニ招キ手ヲ把リテ云ク我將サニ死セムトス汝等須ラク互ニ相和シ相親ムヘシ敢テ相忤フ勿レト且一魚ヲ購ヒ來ラシメ三子ヲシテ共ニ之ヲ食セシメ更ニ告テ云ク我死スルノ後チ心ノ精進ヲ爲セハ可ナリ口ノ精進ヲ爲スハ不可ナリト言畢リテ瞑セリ嗚呼賢ナルカナ斯母ニシテ斯子アル亦宜ベナラスヤ」と。

明治元年〔十八歳〕一月藩廳より壯猶館教授役を仰付らる。

明治二年〔十九歳〕十二月合図方練習を仰付らる。

明治三年〔二十歳〕十月五番大隊合図長を仰付らる。

同年十二月修業のため東京に出発を仰付らる。

明治四年〔二十一歳〕二月東京府兵に加えられ関門上役仰付らる。

同年五月帰国十二月故あり軍職を辞す。この間，明治天皇の御前に於て小隊長として指揮操練し酒肴を賜はるという。

軍職を辞した事情について，「諏訪蘇山君小傳」に次の如く云つている。

「十二月故アリ軍職ヲ辞ス君嘗テ窃カニ謂テ云ク當時兵式訓練法ニ就テ上官ト意見ヲ異ニシ其不可ヲ力説セシモ聽カレス因リテ携フル所ノ銃ヲ倒ニシ上官ノ頭ヲ撲チ而テ職ヲ辞ス官令シテ復タ軍職ニ就クコトヲ禁セリト吁此氣慨アリ以テ他日ノ成功ヲ想見スルニ足ル」と。

明治五年〔二十二歳〕二月金沢航海学校に入学す。

同年十月二十三日金沢市役所の戸籍の原本によれば，同日付をもつて正式に相続す。

明治六年〔二十三歳〕二月金沢航海学校廃校により退学す。尚，同校在学中に水産講習所教員を嘱託せらる。当時の業績について「諏訪蘇山君小傳」は次の如く云つている。「水産講習所教員ヲ嘱託セラレ傍ラ諸多ノ水産事業ヲ研究ス特ニ補鯨法ノ改良ヲ試ミ偶マ麻絲索繩ヲ案出シタリシニ強靱ニシテ耐久性ニ富ムカ故ニ今猶各地ニ汎ク使用サレツヽアリ其他魚貝類ノ罐詰燻肉醃藏等ノ方法ヲ研究シ之ヲ生徒ニ授ケ生徒ノ爲シタル製品ハ市場ニ販賣シ其益金ヲ以テ研究ノ資ニ充テタリ」と。

同年四月初めて九谷の陶画工彩雲樓旭山の門に入り陶画を学ぶ。

明治七年〔二十四歳〕「諏訪蘇山略年譜」に「十月夫人富子を迎ふ」とある。しかし，入籍したのは明治十二年である。

明治八年〔二十五歳〕二月東京に出て陶画を業とす。「諏訪蘇山君小傳」には，「二月家ヲ東京ニ移シ陶器画ヲ業トス君ノ居恰モ工部省御雇教師『フエノロサ』氏ニ隣リ日夕往來シ美術工藝ノ説ヲ聽キ得ル所多シ又大學御雇教師『ワフネル』氏ニ就テ化學ノ説ヲ聽ケリ此二者共ニ他日成業ニ資スル所大ナルヘシ君化學ハ初メ郷土ノ名醫鈴木『文太郎博士の父』高峯『讓吉博士ノ父』両氏ニ就テ梗概ヲ知得シ於是大ニ会得スルニ至リタルナラン」とある。

明治九年〔二十六歳〕「諏訪蘇山君小傳」に次の記事がある。「九年二月東京品川驛字大井ニ於テ陶器製造場ヲ剏設シ陶器像石羔像模型捻造業ヲ自營ス畫師橋本雅邦久保田米仙等ヲ聘シ二十人許ノ徒弟ヲ養ヒ盛ンニ製造セリ」と。

明治十年〔二十七歳〕八月瀬戸・京都その他の製陶地をそ巡遊す。その時の模様を「諏訪蘇山君小傳」に，「各地製陶場ヲ歴觀シ一年許ニシテ歸ル此時九鬼男爵ニ従ヒ南都諸寺正倉院法隆寺等ノ古美術ヲ鑑賞セリ世間美術ノ何タルヲ顧ミサル時ナレハ零碎ノ資能ク名品鉅作

ヲ獲ヘシ然トモ君廉直ニシテ一品タモ歸遺ナク眼福ト識見トヲ豐富ナラシメシノミ」と。

明治十一年〔二十八歳〕七月福井県坂井港陶器製造改良方委嘱せらる。在職中宮内省の命に依り李白觀瀑の大陶像を作り吹上御苑に備付られる。

明治十二年〔二十九歳〕金沢市役所の戸籍原本によれば，八月八日石川県金沢区卯辰下町平民旭徳次二女「ぞ貴」妻として入籍す。

明治十三年〔三十歳〕九月石川県江沼郡九谷陶器会社改良教師に聘せられ，月給は金参拾五円であつたことを証する次の文書が残つている。

記

月給　陶工教師

諏訪好武

一金三拾五円也

右九谷陶器改良ノ爲特ニ盡力勉勵セラルヽニ因リ傭中給與候也

明治十三年九月

九谷陶器会社

社長　飛鳥井　清

支配人　竹内源三郎

明治十四年〔三十一歳〕第二回觀業大博覧会に唐獅子大陶像を出品し昭憲皇太后の御感を蒙り御用品となる。

明治十五年〔三十二歳〕勸業博物館に作品を出品し次の文書が残つている。

諏訪好武

今回勸業博物館臨時開館候處該主旨ヲ了シ出品相成候段奇特ノ事ニ候

該館ハ各有志者ノ注意ニヨリ一層公益ノ増殖スルモノニアレハ尚將來

深ク此ニ注目アランコトヲ希望シ併セテ出品ノ厚意ヲ謝シ候也

明治十五年七月

石川縣令　千坂高雅

この頃から七官青磁の研究に着手す。

明治十六年〔三十三歳〕十月十一日長男「好精」生る。

明治十七年〔三十四歳〕一月九谷陶器会社を辞し，同月陶磁器研究のため東京に赴く。在職中，九谷に於て陶像置物を作ることを創始する。

特に金剛童子六体を作り，佳作として好評を博す。

同年六月石川県工業考案者を命ぜらる。

明治十八年〔三十五歳〕余技として紙巻煙草用製紙を考案し当業者に授く。

明治十九年〔三十六歳〕富山県高岡町（現高岡市）の物産である鉄瓶の蠟型を製しその進歩改良を行う。

明治二十年〔三十七歳〕七月金沢区工業学校補教員となり，次の辞令が諏訪家に保存されている。

諏　訪　好　武

金澤區工業學校補助教員申付候事

但月俸金拾弐円

明治二十年七月十九日

石川縣金澤區役所

明治二十一年〔三十八歳〕六月より工業学校の勤務隔日となる。

金澤工業學校補助教員

諏　訪　好　武

自今月給金七円ヲ給ス

但隔日出勤

明治二十一年六月五日

石川縣金澤區役所

六月石川県銅器会社蠟型の改良を委嘱さる。

七月石川県河北郡法光寺村煉瓦製造場に於て第四高等学校建築用材製造監督を嘱託さる。そのときの様子を「諏訪蘇山君小傳」に，「同年七月石川縣河北郡煉瓦製造場創設ニ際シ該工場ニ於テ第四高等中學校建築用材製造中監督ヲ嘱託セラル初メ此煉瓦用材ヲ弘益館ニ請負フコト容易ナラス當時ノ文部大臣森有禮氏ニ面謁スルノ徑捷ナルヲ覺リ君單身郷ヲ出テ東京ニ抵リ大臣官邸ニ赴キ刺ヲ通シ謁ヲ請フコト一日數次偶々參朝ニ際シ馬車玄關ニ横ハルアリ乃チ轅ニ倚リテ待ツ公至ル因リテ來意ヲ告ケ事立コロニ成ル於是郷ニ歸リ文部省建築技師久留正道ニ謀リ海内比類ナキ良好ノ煉瓦ヲ製シ建築遂ニ成ルヲ告ク今猶ホ屋上ニ君ト久留技師ノ名ヲ連記セル標ヲ掲ケリ君カ事毎ニ熱中ナル概ネ此如シ」とある。

明治二十二年〔三十九歳〕四月石川県立工業学校助教諭試補被命の辞令が残つている。

諏　訪　好　武

石川縣工業學校教諭試補ヲ命ス

月俸金拾円

明治二十二年四月一日

石　　川　　縣

明治二十三年〔四十歳〕「諏訪蘇山年譜」に次の記事がある。「藤蔓其他の樹皮精製して一種の絲を作り，洋服地を織り一時世に行はる」と。

明治二十五年〔四十二歳〕四月石川県工業学校彫刻科教員たることを仮免許せられ，同月助教諭に任ぜらる。

假　免　許　狀

石川縣士族

諏　訪　好　武

嘉永四年五月生

右ハ當分石川縣工業學校彫刻科教員タルコトヲ假免許ス

明治二十五年四月一日

石川縣知事　鈴木大亮代理

石川縣書記官

従六位　森　岡　　眞

第二百拾六号

石川縣工業學校助教諭試補

諏　訪　好　武

任石川縣工業學校助教諭

明治二十五年四月四日

石川縣工業學校助教諭

諏　訪　好　武

月俸金拾円下賜

明治二十五年四月四日

石　川　縣

なお，「諏訪蘇山略年譜」によれば，「十月弟好適の女虎子を養ふ」とある。

明治二十六年〔四十三歳〕「諏訪蘇山略年譜」に「金沢に於て碍子玉にガルハニ鍍金銀を考案し剝落せざるが故に世に行はる」とある。

明治二十七年〔四十四歳〕金沢市役所の戸籍原本によれば「十一月二十九日弓ノ町十二番地十三番地合併ニ移ル」

また，影燈籠および蛙飛跳等の玩具を製作し米国シカゴに輸出し好評を博したという。

明治二十八年〔四十五歳〕「諏訪蘇山略年譜」に蝙蝠傘ハンカチーフに透しを入れ傘の柄に竹を用ひ昭憲皇太后の御用と爲る。此法を人に授く」とある。

明治二十九年〔四十六歳〕五月五日母「亞ん」死亡す。十一月願いに依り石川県工業学校を休職したときの辞令がある。

石川縣工業學校助教諭　　諏　訪　好　武

休職ヲ命ス

明治二十九年十一月三十日

石　川　縣

同月福井県丹生郡宮崎村字小曾原山内伊右衛門の陶器製造徒弟教師に聘せられ，兼ねて土管製造場監督を嘱託せられ，翌年退職す。

明治三十年〔四十七歳〕金沢市八木煉化工場主管及築窯嘱託さる。

證

諏　訪　好　武

當場主管ヲ命ス

明治三十年三月十二日

八 木 煉 瓦 工 場

賞　　狀

諏　訪　好　武

貴殿ノ設計ニ係ル當工場ノ煉化竈ハ其焼成ニ於ケル燃料及時間ノ

昇竈ニ比シ僅少ニシテ而シテ優等ノ品ヲ製出シ得ルヲ證シ其貴殿

ノ功勞少カラサルヲ賞ス

明治三十年九月

八 木 煉 化 工 場

この年十二月に贈られた理由は不明であるが，吸物椀を多数の人達により贈られている。

その人達の中には美術界の優れた幾人かの名も見え，当時蘇山はどの様な人達と交友があつたかが分る。

記

一吸物椀　拾個

右進呈候也

明治三十年十二月二十五日

久田　督
久保田米僊
北村彌一郎
山脇雄吉
石川準禮
板屋嘉七
土谷亀壽
梅田九榮
竹内唸秋
小島金六
青山忠次
吉田理右衛門
村上権右衛門
石橋萬里
宮本久太郎
乾　勝次郎
山中剛十郎
西出吉平
池ノ上吉彦
藤岡千賀
金子　琴

諏訪好武殿

明治三十一年〔四十八歳〕富山県伏木煉瓦株式会社に奉職す。

證

諏　訪　好　武

右今般場長兼技術長申談候事

明治三十一年二月

伏木煉瓦株式会社

諏　訪　好　武　殿

三月石川県工業学校退職金支給さる。

元石川縣工業學校助教諭

諏　訪　好　武

給與金三拾六円

右府縣立師範學校長俸給並公立學校職員退隠料及遺族扶助料法ニ依リ

之ヲ給ス

明治三十一年三月三日

石　川　縣

明治三十二年〔四十九歳〕十二月伏木煉瓦株式会社を退職す。

明治三十三年〔五十歳〕一月京都粟田錦光山宗兵衛の東工場製陶改良を嘱託せられ，彩釉透彫花瓶等を作る。

明治三十四年〔五十一歳〕

諏　訪　好　武

本會技術員ヲ嘱託ス

明治三十四年十月七日

日本菩提會本部

明治三十六年〔五十三歳〕十月日本菩提会技術員を辞す。「諏訪蘇山略年譜」によれば，「在職中暹羅國王より分賜の佛骨を納むべき黒塗螺鈿模様の龕を作り日暹寺に安置せらる」とある。

明治三十七年〔五十四歳〕満俺を釉薬に用ふる事を案出し能登より採掘す。

明治三十八年〔五十五歳〕「諏訪蘇山略年譜」によれば，「各種西洋釉薬を自製し其法を臼井友田の二氏に傳へ二氏今に之を事業とす」とある。

明治三十九年〔五十六歳〕十月錦光山の嘱託を辞す。

明治四十年〔五十七歳〕一月京都市五条坂で製陶業を開始し，七官青磁，交趾釉，白高麗，漆黒釉等の作品を試む。

明治四十一年〔五十八歳〕白磁の研究成る。

明治四十二年〔五十九歳〕「諏訪蘇山略年譜」によれば，「東宮（今上）静岡市外臨濟寺の國寶唐物雨龍陶器一輪生，倶利香合，ノンコウ作香爐等を感賞し給ふ。伊藤博文その仿製を命じて献上せんとす，器成るに先ち十月博文暗殺さる。其五十日祭の日之を靈前に供す。唐式人馬の泥埴を作る。京都の第六回全國製産品博覧會へ出品して銀牌を受く」とあり，「諏訪蘇山君小傳」に「四十二年京都美術協會へ自製出品ニ付同会ヨリ銀牌ヲ受ク」とある。

明治四十三年〔六十歳〕「諏訪蘇山略年譜」に「八月伊羅保釉高麗狗一對を作り五條坂若宮八幡宮に奉納す。京都第七回全國製産品博覧會へ出品し銅牌を受く。倫敦の日英博覧会に出品して銅賞を受く」とある。

大正元年〔六十二歳〕十二月三十一日長男好精死亡す。

大正二年〔六十三歳〕青磁鳳凰耳花瓶，青磁鯉耳花瓶等を作り，「鳥の子青磁」を案出す。

大正三年〔六十四歳〕「諏訪蘇山略傳」によれば，「一月，朝鮮李王職より高麗古窯跡取調嘱託，同月渡鮮。十月青磁鳳凰耳花瓶を李王家に献上して嘉納さる。十一月李王家舊高麗窯再興設計并に工場主管被命。同月歸洛。青磁紅魚の器を作る。鶉斑紋の器を作る」とある。しかし「諏訪蘇山君小傳」には「十月朝鮮李王職ニテ高麗古窯舊跡發見ニ付取調嘱託セラル乃チ病ヲ力メテ渡鮮シ實地ヲ踏査シ且自製陶器花瓶一個ヲ李太王殿下に獻シ金若干ヲ賜ヘリ調査結了シタルヲ以テ十一月歸京ス同月李王家ニ於テ高麗窯再興ノ議成リ昌德宮苑内鷹峯ニテ築窯等諸般ノ設計ヲ嘱託セラレ主官ヲ被命仍リテ準備成ルヲ待チテ翌四年六月築窯成ス……」とある。

大正四年〔六十五歳〕「諏訪蘇山略年譜」に「六月昌德宮苑内鷹峯に築窯成る八月再渡鮮。李王家より新窯成績良好の故を以て銀盃及酒瓶，銅印を賞賜さる。十月歸洛」とあり「諏訪蘇山君小傳」には「六月築窯落成ス附隨ノ設備全ク整ヒタルヲ以テ先ツ徒弟両名ヲ派シ製陶ニ従事セシム同年八月再ヒ自ラ渡鮮シ九月初焼ヲ試ム時恰モ併合祝賀ノ爲メ久邇宮殿下台臨ニ會シ李王殿下此初焼五碗ノ一ヲ進獻セラレタリ製陶ノ結果頗ル良好ナルト病未タ全ク癒サルトニ依リ十月辞シテ京ニ歸ル爾來京都ニ在ルモ依然監督指揮ノ任ニ膺レリ」とある。

また，この年三月東京帝室博物館へ青磁一個を寄附し，八月木盃一組を賜はる。

九月京都における戦捷紀念博覧会（諏訪蘇山君小伝では大正博覧会とある）に青磁花瓶を

出品し銀賞を受く。青磁達磨像等を作る。

十月日本赤十字社正社員に列せらる。

爰ニ諏訪好武氏

本社忠愛ノ主旨ニ協同セラルヽヲ以テ定款ニ照シ正社員ニ列ス

大正四年十月三十日

日本赤十字社總裁

大勲位功二級　載 仁 親 王

日本赤十字社長

従二位勲一等　子爵　花房義質

大正五年〔六十六歳〕石川県物産陳列館で十月十五日より十一月五日まで美術工芸品展覧会が開催され鳳凰耳付花瓶一個を出品し，飛青磁，大閣青磁，刷毛目，三島等の製作をす。

大正六年〔六十七歳〕六月帝室技芸員を命ぜられ，次の文書が残つている。

諏　訪　好　武

帝室技藝員ヲ命ス

大正六年六月十一日

宮　内　省

命　令　書

第一　帝室技藝員ハ本邦ノ美術ヲ奬勵スル爲古ヲ徴シ今ヲ稽ヘ工藝技術ヲ練磨シ後進ヲ誘導スルヲ旨トスヘシ

第二　技藝員ハ其志操ヲ高潔ニシ其體面ヲ損スル如キ擧動アルヘカラス

第三　技藝員ハ宮内省ヨリ特ニ製作ヲ命セラルルコトアルヘシ但其製作ニ対シ相當ノ報酬ヲ支給スルモノトス

第四　技藝員毎年両度若クハ臨時ニ其工藝技術上ニ關スル事項ニ就キ帝室博物館總長ヨリ諮問ヲ受ケ若クハ報告ヲ命セラルルトキハ之ニ應答シ若クハ報告書ヲ出スヘシ

第五　帝室博物館總長ハ技藝員ノ業務素行ヲ監督シ隨時技藝員の製作物ヲ臨檢シ又ハ製作品ヲ檢視スルコトアルヘシ

右ノ條項宮内大臣ノ達ニ依リ命令ス

大正六年六月十一日

帝室博物館總長　股野　琢

また，「諏訪蘇山略年譜」によれば「紅泐の器を作る。餘技に鉄瓶を作る」とある。

大正八年〔六十九歳〕七月宮内省より特に製陶の御用命を受く。

十一月作品天覧を賜る。

一　陶磁器

右ハ今般天皇陛下行幸中京都皇宮内ニ陳列シ

天覧ニ供シ候條及通牒候也

大正八年十一月三十日

京都府知事　馬淵鋭太郎

諏訪蘇山殿

十二月宮内省より御用命の花瓶香爐を謹製す。

同月久邇宮殿下より御紋章付精字金印を下賜さる。この年瑞龜香爐，白泥凉爐，ボーフラ等を製作する。

大正九年〔七十歳〕十二月久邇宮御渡台につき花缾，香爐等多数御用命を受く。

「諏訪蘇山略年譜」によれば「イリヂユーム應用の器を作る。五彩陶器を作る」とある。

大正十年〔七十一歳〕法隆寺聖徳太子一千三百年忌法要に各宮殿下の命を承け銀製香爐に副う青磁大香盒二器を謹製す。

十一月東京彩壺会に雉子大香爐を出品し「玄化」の文を刻した金印を贈らる。この年窯変を試むという。

大正十一年〔七十二歳〕「諏訪蘇山略年譜」に「一月五日感冒に罹り，肺炎，神経衰弱，脳症等次第に加はり二月八日夜十時歿。病革るや従七位に敍せられ，歿するに及んで祭祀料金参百円下賜」とあり，次の文書が保存されている。

諏訪好武

特旨ヲ以テ位記ヲ賜フ

大正十一年二月八日

宮内省

諏訪好武

敍従七位

大正十一年二月八日

宮内大臣　従二位勲一等 子爵 牧野伸顯宣

「同略年譜」はつづけて「十四日建仁寺方丈に葬儀を營み同日荼毘して骨を建仁寺僧堂に葬り，又金澤の菩提寺笹ヶ町興德寺に分骨す。法名金水院蘇山精齋居士。虎子襲名す」とある。また，「諏訪蘇山君小傳」には「君大正十一年一月五日ヨリ感冒ニ罹リ後チ肺炎ヲ發シ經過順良ナリシモ時嚴寒ニシテ病餘老軀疲勞回復甚タ遲緩加ルニ痼疾ノ神經衰弱其虛ヲ衝キ威ヲ逞フス二月七日卒然腦溢血ヲ發シ翌八日午後十時遂ニ逝ケリ病革ルヤ事　叡聞ニ達シ特旨從七位ニ叙セラレ君感泣　恩ヲ拜シテ瞑セリ其逝ケルヤ祭資料ヲ下賜セラル謂ツ可シ死シテ餘榮アリト享年七十又二月ノ十四日建仁寺方丈ニ壯嚴ナル葬式ヲ擧ク來リ会スル者遠近無慮一千人盛ンナリト謂フ可シ荼毘ニ付シ同寺内塋域ニ葬ル又分骨ヲ金澤興德寺先塋ノ側ニ瘞リ俱ニ豐碑ヲ建ツ女虎子家ヲ繼キ業ヲ續ク配富子子ナク君ノ弟好直ノ次女ヲ襁褓ノ間ニ養ヒタリ是ヲ虎子ト爲ス」と云つている。

大正十二年〔歿後一年〕「諏訪蘇山略年譜」によれば「二月八日一周忌法要を建仁寺内両足院に營む。友人木村得善，小幡茂等八九両日遺作を建仁寺内禪居庵に展觀す，出陳二百八十二點。尚両足院に煎抹両茗莚を設く」とある。

作　　品

蘇山の作品は多数現存しているが，その代表作と思われるものは「蘇山之陶器」「蘇山賸影」等に写真が掲載されている。参考のためにそれを各年代順に整理して紹介する。

「蘇 山 之 陶 器」

井戸茶盌	(明治十五年頃作)
五彩舌切リ雀爺置物	(明治二十五年頃作　於金沢市)
髑髏香爐	(明治三十五年頃作)
壽老人置物	(明治四十年頃作)
五彩翁置物	(明治四十年頃作)
漆黒釉鯰置物	(明治四十年頃作)
伊羅保釉梟香爐	(明治四十年頃作)
鶏香爐	(明治四十年頃作)
彩色松竹梅彫刻花鮮	(明治四十年頃作)
白瓷尊式花鮮	(明治四十年頃作)

伊羅保釉夜学火灯シ　(明治四十年頃作)

梅畫茶盌　(明治四十年頃作)

璃瑠釉花鮮　(明治四十一年頃作)

彩色葡萄彫刻花鮮　(明治四十二年頃作)

青華水指　(明治四十二年頃作)

伊羅保釉唐獅子　(明治四十三年京都五條坂若宮八幡宮ニ奉納セルモノ)

交趾三彩釉觀音像　(明治四十三頃年作)

宋窯佛像付花鮮　(明治四十三年頃作)

人物埴輪　女子立像　(明治四十四年頃作)

人物埴輪　男子立像　(明治四十四年頃作)

人物埴輪　男子立像　(明治四十四年頃作)

馬上人物埴輪　(明治四十五年頃作)

樂人埴輪　三軀　(明治四十五年頃作)

青瓷袋鼠香合　(明治四十五年作)

刻三島花鮮　(大正元年頃作)

呂宋壺　(大正元年頃作)

瀬戸釉雷神彫刻花瓶　(大正元年頃作)

滿俺釉花鮮　(大正元年頃作)

西藏佛像　(大正元年頃作)

薄肉羅漢掛額　二面　(大正元年頃作)

五彩耳垢取唐獅子置物　(大正二年頃作)

五彩唐子置物　(大正二年頃作)

青瓷鳳凰耳花鮮　(大正二年頃作)

黑牡丹香合　(大正二年作)

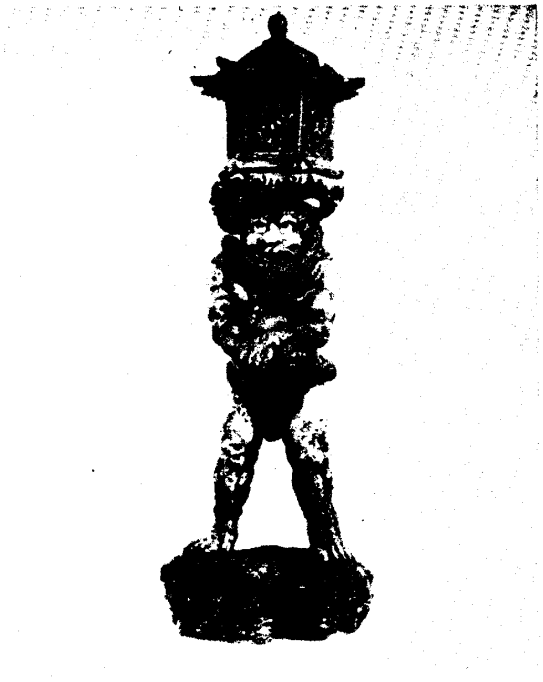
高麗白瓷觀音像　(大正三年頃作)

鶉斑紋香爐　(大正三年頃作)

鳥乃子青瓷花鮮　(大正三年頃作)

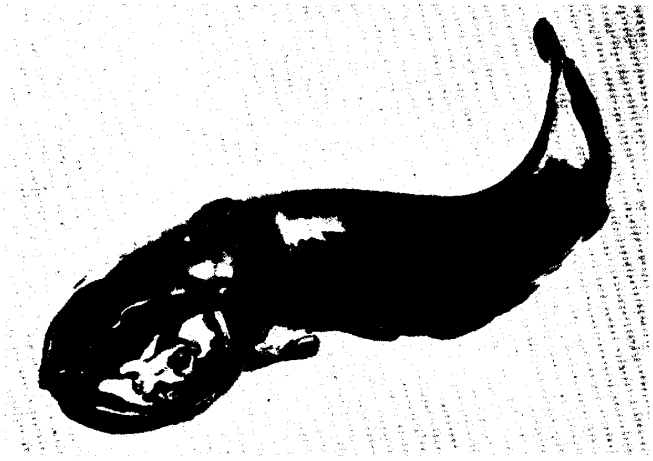
青華虎香合　(大正三年作)

朝鮮昌徳宮初窯記念三島菓子鉢　(大正三年頃作) 円形印ニハ昌徳長円形印ニハ主管蘇山



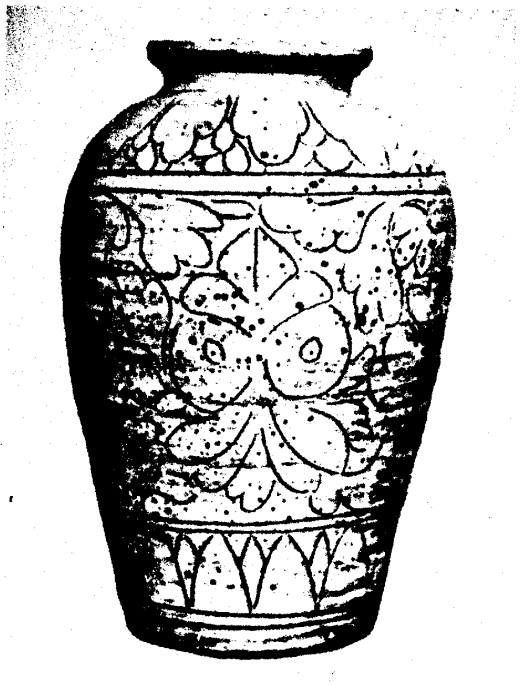
(2)

(3)

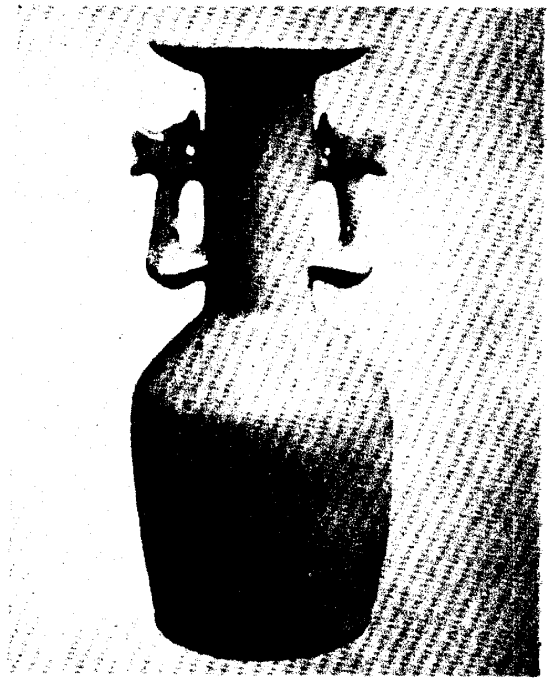


(4)

(5)

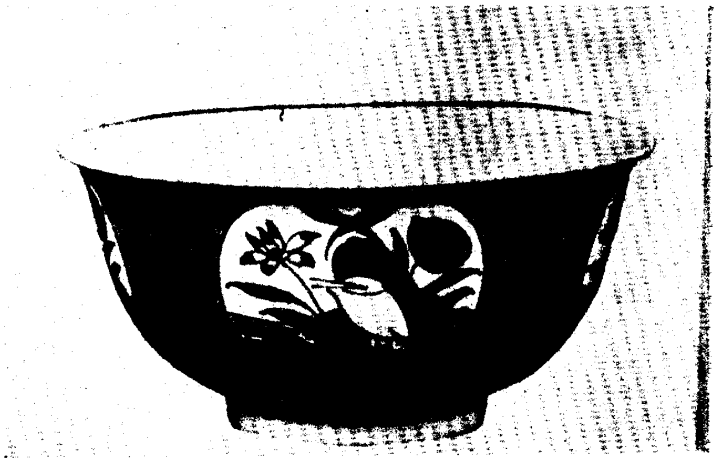


(6)



(7)

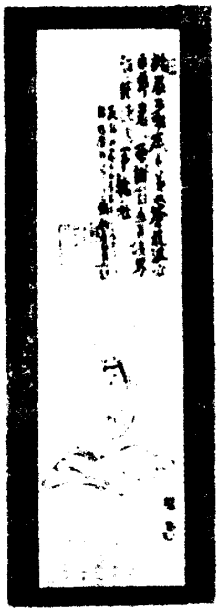
(8)



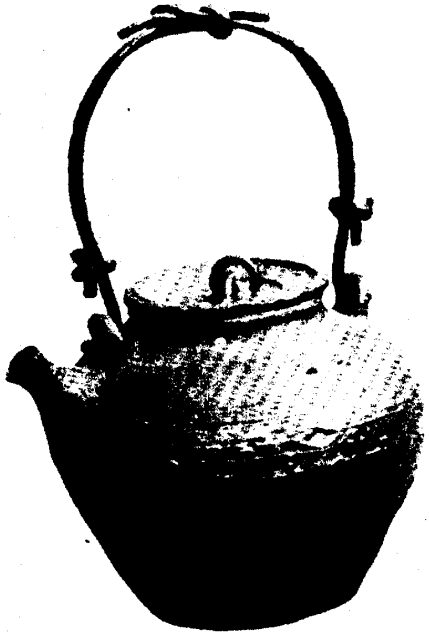
(9)

(10)

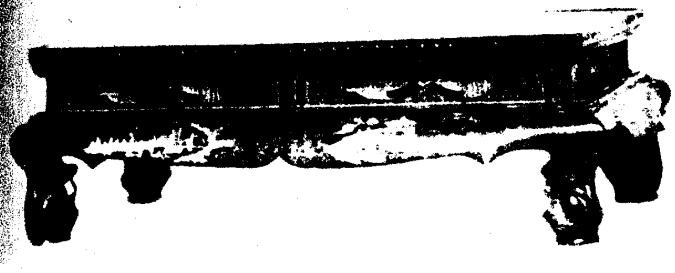
(11)



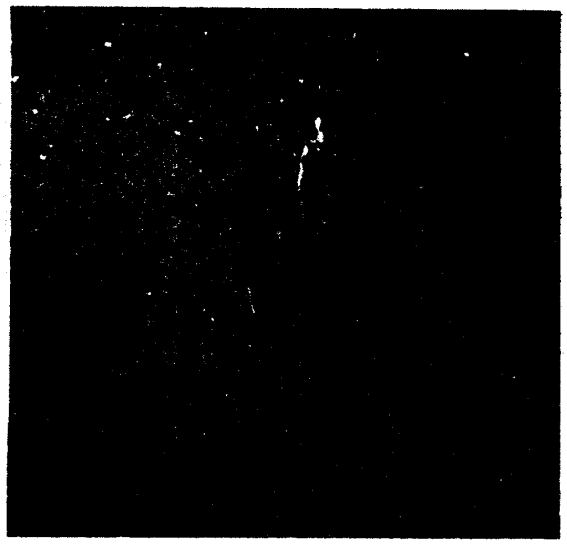
(12)



(13)

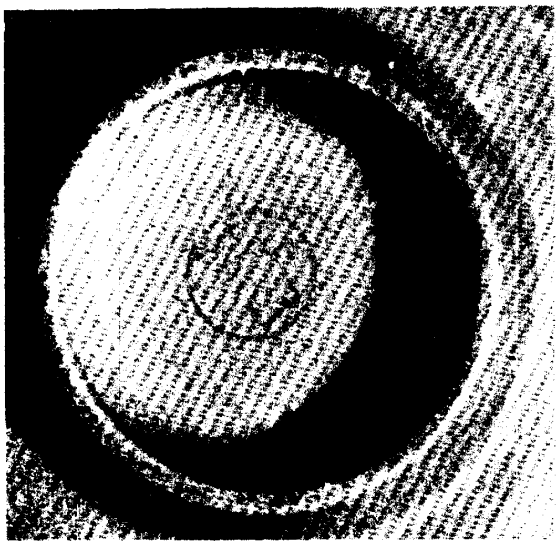


(14)



(16)

(15)



(17)

(18)

図 版 説 明

(1) 初代諏訪蘇山の肖像

(2) 龍燈　大聖寺在住時代作

(3) 官女置物　金沢在住時代作

(1) 漆黒釉鯰置物　明治四十年頃作

(5) 伊羅保釉唐獅子　明治四十三年京都五条坂若宮八幡宮に奉納せるもの

(6) 刻三島花缾　大正元年頃作

(7) 青瓷鳳凰耳花缾　大正二年頃作

(8) 光悦写し赤楽抹茶々盌　大正七年頃作

(9) 金蘭手小鉢　晩年作

(10) 青瓷印材　富岡鉄斎篆刻　晩年作

(11) 冨士香爐　着色および下部の書は鉄斎　絶作

(12) 鉄斎賛達磨および観音像軸

(13) 鉄缾　明治三十六年頃作

(14)(16) 螺鈿大卓　晩年作

(19) 初代蘇山の印

(17) 二代蘇山の印

(18) 初代蘇山の箱書

トアリ

鳥ノ子青瓷波魚模様菓子鉢（大正三年頃作）

青瓷象篏卯香合　（大正四年作）

旭昇釉樂焼茶盌　（大正四年頃作）

青瓷茶盌　（大正四年作）

初メ大正三年朝鮮李王家ヨリ舊高麗窯再興ノ爲招聘セラレ翌四年昌徳宮苑内鷹峯ニ築窯落成シ同年八月新窯ニテ初焼成シタルモノナリ円形印ニハ昌徳宮円形印ニハ主管蘇山トアリ書は當時李王職次官タリシ小宮刀水氏ノ題セラレシモノナリ

立像達磨置物　（大正四・五年頃作）

交趾三彩釉獅子置物　（大正五年頃作）

緑釉五足香爐　（大正五年頃作）

緑釉花鮒　（大正五年頃作）

青瓷辰香合　（大正五年作）

絵高麗水指　（大正五年頃作）

刷毛目水指　（大正五年頃作）

太閤青瓷香爐　（大正五・六年頃作）

青瓷巳香合　（大正六年作）

交趾三彩水注　（大正六年頃作）

青瓷東福寺香爐　（大正七年頃作）

青瓷火馬香合　（大正七年作）

光悦寫シ赤樂抹茶々盌　（大正七年頃作）

高麗寫水注　（大正七年頃作）

青瓷紅龍菓子鉢　（大正七年頃作）

シヤム寫シ小鉢　（大正七年頃作）

伊羅保釉燈籠　（大正七年頃作）

青瓷坐像達磨置物　（大正七・八年頃作）

三彩瑞龜靈芝香爐　（大正八年頃作）

青瓷起上リ小法師香合　（大正八年頃作）

曲輪香合　(大正八年頃作)

青瓷羊香合　(大正八年頃作)

壽老香合　(大正八年頃作)

ハンネラ水指　(大正八年頃作)

黑彩色鯉置物　(大正九年作)

青瓷袋形香爐　(大正九年頃作)

瀬戸釉章魚香爐　(大正九年頃作)

青瓷算木花缾　(大正九年頃作)

青瓷三猿香合　(大正九年作)

乾山寫シ畫賛菓子皿　五枚　(大正九年頃作)

高麗白瓷聖徳太子像　(大正十年作)

青瓷誕生佛像　(大正十年頃作)

青瓷鶏香合　(大正十年作)

青瓷大形香盒　(大正十年頃作)

窯変天目茶盌　銘重陽　(大正十年作)

赤畫犬香合　(大正十一年作)

青瓷立像觀音　(晩年作)

青瓷岩上觀音像　(晩年作)

青瓷布袋置物　(晩年作)

襁褓像置物　(晩年作)

五彩筒形香爐　(晩年作)

漆黑釉明ケ烏香爐　(晩年作)

青瓷爵香爐　(晩年作)

青瓷魚耳香爐　曲輪香盒　(晩年作)

五彩雉子香爐　(晩年作)

青瓷紅魚白金眼入香爐　(晩年作)

白瓷遊環花缾　(晩年作)

五彩松下人物畫花缾　(晩年作)

五彩鳳凰畫花缾　(晩年作)

青瓷驛路鈴形掛花入　　(晩年作)

青瓷夜學瓶掛　　(晩年作)

赤畫瓢形振出シ　　(晩年作)

オランダ白雁香合　　(晩年作)

彩色雀香合　　(晩年作)

青瓷手桶形水指　　(晩年作)

青瓷桃水注　　(晩年作)

金襴手小鉢　　(晩年作)

白泥保冨羅　白泥鬼面凉爐　緑釉蓮葉形爐台　(晩年作)

青瓷印材　鉄齋先生篆刻　(晩年作)

緑釉鹿壽置物

三彩大津絵鬼念佛置物

緑釉獅子香爐

茶磁向獅子香爐

白瓷鼎形香爐

青瓷袴腰香爐

伊賀花缾

青瓷浮牡丹花缾（高サ二尺張リ一尺)

南蛮花缾

青瓷浮牡丹花缾（高サ一尺三寸)

鉄砂釉花缾

青瓷遊獲紅魚花缾

飛青瓷花缾

刻三島徳利

伊羅保釉猪灰落シ

白瓷香合

紫交趾釉茄子香合

黑釉天目茶盌

高麗寫シ双魚鉢

瀬戸釉蝙蝠茶盌

絵高麗章魚畫茶盌

刷毛目茶盌（銘抱石）

鶉斑紋茶盌

雲鶴三島茶盌

高麗寫シ白瓷水注

ハンネラ急須

瀬戸釉茶入

絵高麗蛸畫菓子鉢

伊羅保釉風字硯

白瓷印柱

白瓷印柱

白瓷水滴

青瓷硯屏

青瓷福壽硯

飛青瓷楓葉墨臺

青瓷千鳥香爐

赤絵一輪生

染付煎茶碗

金襴手急須　茶碗　（富岡鉄齋先生筆）

この外「蘇山之陶器」には陶器以外の余技の作品も掲載してある。

竹製墨斗　（明治二十七年頃作）

乾漆諫鼓時計　（明治三十年頃作）

乾漆時計　（明治三十四年頃作）

竹製達磨刻茶箕　（明治三十四年頃作）

乾漆梅枝取手付盆　（明治三十五年頃作）

手提抹茶道具一組　（明治三十五年頃作）

鉄瓶　（明治三十六年頃作）

竹製線香筒　（明治三十七年頃作）

竹製煙管筒　　(明治四十三年頃作)

曲輪硯箱　曲輪筆柄　小刀　青瓷硯　(大正七年頃作)

推朱香合　　(大正七年頃作)

螺鈿大卓　　(晩年作)

乾漆補足靈芝如意　鶉斑珠數　(晩年作)

竹製蝸牛付掛花入　　(晩年作)

富岡鉄齋先生賛達磨像軸

同　觀音像軸

「蘇　山　賸　影」

龍燈　　(大聖寺在住時代作)

龍燈　　(大聖寺在住時代作)

恵比須置物　　(大聖寺在住時代作)

西行法師像置物　　(大聖寺在住時代作)

大黒像置物　　(大聖寺在住時代作)

一ッ目小僧置物　　(大聖寺在住時代作)

蝦蟇仙人像置物　　(大聖寺在住時代作)

瑞龜置物　　(大聖寺在住時代作)

鉄拐仙人置物　　(大聖寺在住時代作)

樓閣山水薄肉陶板連作器局　(大聖寺在住時代作)

鐘馗像置物　　(大聖寺在住時代作)

茶筌賣翁置物　　(大聖寺在住時代作)

官女置物　　(金沢在住時代作)

天狗面額　　(金沢在住時代作)

病気快癒ノ時金沢市ノ來教寺ニ安置セル琴平大權現堂ヘ奉納セシモノ

乾漆　菅公置物　　(金沢在住時代作)

梅薄肉彫刻透花瓶　　(京都五條坂在住時代作)

於多福像置物　　(京都五條坂在住時代作)

松竹梅薄肉刻文透花瓶　(京都五條坂在住時代作)

芥子薄紋花瓶　(京都五條坂在住時代作)

元祿踊置物　(京都五條坂在住時代作)

鬼置物　(京都五條坂在住時代作)

龍　神　(京都五條坂在住時代作)

文珠菩薩像置物　(京都五條坂在住時代作)

利休居士像　(京都五條坂在住時代作)

出山釈尊像置物　(京都五條坂在住時代作)

鐘馗置物　(京都五條坂在住時代作)

達磨像置物　(京都五條坂在住時代作)

觀音像置物　(京都五條坂在住時代作)

狸香爐　(京都五條坂在住時代作)

雁來紅薄肉刻文花瓶　(京都五條坂在住時代作)

白瓷大國主命像置物　(晩年作)

冨士香爐　(絶作)

以上は大正十二年および昭和九年に代表作と思われる作品を展観したときの記録であるが，蘇山の作品は現在も多数残つている。蘇山がどの様な作品を年間どれくらい製作したかを知る好資料が発見された。

それは蘇山の晩年大正九年と十年の製作品の覚帳である。これは，あくまでも陶工蘇山の覚帳であるため，判読困難な箇所や数字の不合理な箇所，あるいは月日の前後したところや意味不明の記号等がある。この点二代蘇山に尋ねたが全く解らないそうである。しかし，大体の様子は解ると思われるので参考のため出来るだけ原文のまま紹介する。

大正九年一月一日目出度書初

一月四日	尺六浮牡丹花入　五	二本	○
	尺三　浮牡丹花入　六	二本	○
	龍耳花入　十	十本	○
	鳳凰耳　尺七　花　六	六本 五本	○
	袴腰　大　十 中　十	十一個 十九個	○

	端反鉢　六寸五　十 六寸　十	十枚 十三枚	○ ○
	尊式　十	二本	○
	香合　四十	四拾参個	□
	千鳥香炉　二十	弐拾個	□
	□□香炉　三十	参拾個	□
	酒呑各種　五十	五十個	□
	朝鮮皿　五十	五拾枚	□
	鉄盃香炉　二十	十四個	○
	すずめ水滴　十	九個	△
	からす香炉　五	五個	△
	筆洗　十	七個	△
	硯扉　十	八個	△
	ふぐ香炉　五個		
	ふじ形取り		△
	岩上観音　五	翌月廻シ	△
	達磨　六	参個	⊖
	同起上り小法師　三	参個	⊖
	算木花入　十	参本	⊖
	鯉置物　三	一個	⊖
	五足香炉　十	十一個	×○
	小達磨　六個	六個	⊖
	桃香合　十五	拾参個	×
	すずめ香合　十五	十一個	×
	東福寺香炉	拾五個	□
	小袴腰青磁香炉	拾五個	□
	大陽刻絞鉢	八枚	□
	釈尊	三個	△
二月一日書始	端反鉢　拾五枚	十枚	○
二月	尊式花入　十		○

二月	大袴腰　十	八本	○
二月	龍耳　十	十本	○
二月	中袴腰　十五本	十二本	○
	算木香炉　十	十本	□
	桃香合　二十	五個	×
	岩上観音　五	四個	△
二月分	竹すずめ　十	拾弐個	△
	朝鮮皿　二十	二拾五枚	□
一月分	夜学フタオキ	七個	○
〃	夜学香炉	五個	○
〃	紅魚付鉢	八枚	○□
〃	網刻鉢	三枚	○
〃	手桶水指	四個	○
〃	夜学瓶掛	二個	○⊖
〃	三嶋水指	六個	○
〃	三嶋茶わん	八個	○
〃	はけ目鉢	五枚	○
〃	同　茶わん	十一枚	○
〃	三嶋鉢	参枚	○
二月一日	夜学瓶掛	四個	○⊖
〃	紅魚付花生	五本	○□
二月	とび花生	五本	○
〃	白地茶碗	二十五個	○
〃	同　井	二枚	○
〃	同　尊式大ノ花生	一本	○
〃	同　香炉	三本	○
〃	小袴腰	七個	□
〃	青瓷　茶筒	八個	△
〃	同　角，玉子形硯　取交	七枚	△

〃	同　釈尊	一個	△
〃	青瓷　算木花生	七本	⊖
〃	ふぐ香炉	二個	⊖
〃	乾山角皿　絵付	十枚	⊖
〃	同　水滴	二個	△
〃	青瓷　天目形茶わん	二十個	○
〃	紅魚付水指	五個	○□
〃	尺三　浮牡丹花生	二本	○
〃	御用品香炉	二本	○⊖
〃	青瓷　袋鼠香合	九個	⊟
〃	乾山角皿	拾八枚	×
〃	青瓷　角蓋置	五個	×
〃	中，小合袴腰	拾参個	□
〃	信樂鐵鉢	七拾個	□
〃	尺六　浮牡丹花生	三本	○
〃	浮牡丹瓶掛	二個	○
〃	尺一寸　紅魚花生	三本	○□
〃	乾山角皿	拾壱枚	×
	すずめ香合	拾四個	×
	青磁　袋鼠香合	五個	⊟
三月二日	鍔口花入　十五	取交　十六本	○
	八寸　浮牡丹花　十	拾本	□
	かぶら形花入　十	拾本	○
	なまず形取り		○⊖
	小鯉種形		⊖
	中袴腰　十五	十七個	○
	小　首長袴腰　十	十二個	○
	木米酒呑　四百	二百四十	□
	小龍耳　十五	拾五本	□

	六寸五　七寸　端反取交　二十	取交十七枚	○
	鳳凰耳　尺一分　十	十一本	○
	尺三環耳　六本	四本	○
	立像達磨　六	五個	△
	大徳寺三ツ具足　四組	四組	○
四月分	白の　鳥の子天目碗　十	拾八個	□
三月分	桃香合	二拾個	⊟
	布袋置物　五ツ	六個	△
二月	大陽刻紋鉢	拾参枚	□
	小陽紋鉢	拾五枚	□
	大竹節香炉	拾個	□
	小胴紐香炉	拾一個	□
	千鳥香炉	五個	□
	紅魚付小香炉	弐個	□
	朝鮮小皿	四拾五枚	□
二月分	交趾　馬香合	拾六個	△⊟
三月	三嶋花生	二本	○
	三嶋　はけ目鉢　取交	八枚	○
	三嶋　はけ目取交　茶碗	拾一個	○
	青磁　千鳥香炉	弐拾五個	□
	白雁香合	弐個	⊖
	鯰置物	弐個	⊖
	信樂　鉄鉢絵付		⊖
	乾山角皿	拾五枚	
三月分	すずめ香盒	十個	×
〃	桃水指型取り		△
〃	小鯉型取り		⊖
〃	さる香合	拾五個	□
三月二十二日	倶利香合地一寸五分 二寸 二寸五分 取交 二十 一斗り	取交二十三個	○

〃	小尊式花入　拾五本	拾四本	□
〃	鍔口　十五本		
〃	飛青瓷　花　十本	拾本	○
〃	袴腰　大　中　廿本	二十本	○
〃	東福寺　十五本	五個	□
〃	鉄蓋　青瓷　廿個	九個	□
〃	小鯉　三個	一個	⊖
〃	烏　五個	参個	△
〃	桃水注　五個	六個	△
三月	筆さし	四本	○
	浮牡丹環耳花生	二本	○
	瓢單形花生	二本	○
	尺三　浮牡丹環耳	二本	○
	すずめ香合	拾九個	×
	貝皿	弐拾八枚	×
三月分	獅子香炉	拾個	△
四月	こうち茶わん	弐拾八個	○
三月	白雁香合	参個	⊖
〃	なまず置物	弐個	⊖
四月六日	貝皿　信楽 青瓷　六拾斗り	信楽　三十七枚 青磁　十九枚	× ×
〃	袴腰　中　三拾個	拾七個	○
〃	浮牡丹瓶掛　五個	四個	○
〃	夜学瓶掛　五個	四個	○日
	四寸　夜学香炉　十個	七個	○
	龍耳花入　十五本	拾参本	□
	亀の子香合　十	拾壱個	△
	座像達磨　十		
	算木花入	四本	⊖
	尺環耳　魚付花入　五本	六本	○□

	二寸五分　魚付香炉　十	拾弐個	□
	鼠克山　片口　十	三枚	○
	同　□□□花入　五本	二本	○
	同　水指　五本		
	青　岩上観音　十	七個	△
	青　福寿香炉　十	七個	○
	角　夜学蓋置　十五	十五個	×
	鳥の子　釈尊	九個	△
四月	なまづ香爐	一個	⊖
〃	青磁　小くび長袴腰	拾四個	□
〃	同　鐵鉢	拾五個	□
〃	同　千鳥香炉	拾個	□
〃	同　立像達磨	弐個	△
〃	同　桃香盒	弐拾八個	⊟
〃	同　龍耳中花入	拾弐本	□
	同　桃香合	九個	⊟
	同　東福寺香炉	拾弐個	□
	同　座像達磨	五個	⊖
	乾山皿絵付	大　五枚 小　拾五枚	⊖
	端反鉢　六寸五	二十枚	○
	袴腰　中	拾二本	○
	鳳凰耳　小	十本	○
	こうち茶碗	二十個	○
	大　こうち茶碗	九個	○
五月一日	青瓷　尺三　五本	六本	○
	同　尺六　五本	五本	○
	瓶かけ浮牡丹　五本		
	夜学　五本	二個	○
	取交ゼ　水　十本		

	紅魚鉢　取交	六枚	○□
	シヤム鉢　十五枚		
	鳥の子尊式花入　六本		
	青じ　陽紋鉢　十	十四枚	□
	紅魚香炉　十	拾一個	□
	竹の子小花入　拾五本	拾一本	□
五月分	角蓋置　二十	弐拾個	×
〃	桃香合　百三十	百個	△
〃	千鳥　十五	十参個	□
〃	算木　十五	十個	□
〃	人形手煎茶碗　五十	参拾個	□
〃	東福寺　十		□
〃	繩耳香炉	八個	□
〃	桃水指	五個	△
〃	大　桃香合	九個	⊟
〃	芭蕉翁肖像種型		⊖
〃	乾山小角皿絵付	十枚	⊖
〃	ねづみ香合	参拾個	⊟
〃	桃煎茶碗	六拾個	□
五月十七日	□々角香炉　十	七個	△
	尺三　尊式花生　六本	二本	○
	バシヨ像　四十個	拾五個	⊖
	雀香合　二十個	二十個	×
	角鉢　青瓷　上石　十五	取交ゼ　五枚	△
	小　尊式花入　十五	十一本	○
	盃　取まぜ百	百個	□
	火入鉄鉢　切立　六十	五拾個	□
	カメ形　算木花入　五本	四本	○
	切立　瓶掛　四ッ	四個	○

	丸硯　大小　十		
	具利地香合　取交	五十五個	○
	具利地角板	二枚	○
	煎茶急須	二組	○
	算木環耳花生	五本	○
五月分	青瓷　角硯	三枚	△
	朝鮮土菓子鉢	拾枚	○
	同　土茶碗	拾九個	○
	三島茶碗	四個	○
	青磁　紀念桃煎茶碗	五拾個	□
	青磁　蠟子香爐	三個	⊖
	白瓷　座像観音　大	三個	△
	乾山　小　角貝皿	二十二枚	×
六月	朝鮮香合	六個	⊟
〃	青磁　木米写酒呑	百個	□
	鍔口花生	拾二本	○
	浮牡丹　二尺花入	壱本	○
	中　袴腰香炉	拾九個	○
	朝鮮香合	参拾九個	⊟
	福寿香炉	八個	○
六月十二日	六寸　碗形鉢　十	取交　拾四枚	○
	尺環耳花入　五	六本	○
	丸形硯　大小　十	十個	○
	大　袴腰香炉　十	十一本	○
	双魚　五寸皿　二十		
	徳利　二十	十二個	□
	尺二寸位 形小紅魚花入　五	五本	○
	立像達磨　五	五個	⊖
	丸形浮牡丹花入　三	弐本	○

	大中ノ間　袴腰香炉　十	十一本	○
	中小ノ間　袴腰香炉　十	小取交ゼ十八個	□
	八寸　環耳花入　八	八本	○
	四寸五分　朝鮮皿　百	七拾五枚	□
	鳳耳花入　大小　二十	小　八個 大　十本	□ ○
	筆筒　経一寸八分　高三寸八分　三		
		六本	○
	飛形紅魚花生	八本	□
	青瓷　亀香合	拾一個	△
	同　桃水指	拾個	△
	座像達磨	参個	⊖
	乾山角皿絵付	二拾枚	⊖
	雀香合	拾四個	×
	乾山　小角皿	弐拾八枚	×
	青磁　貝皿	七枚	×
	薩摩　子持観音	五個	×
六月分	白瓷　観音　大	三個	△
〃	白瓷　観音　小	四個	△
	座像達磨	二個	⊖
	乾山皿絵付	二十五枚	⊖
	算木角花生	二本	⊖
	古帰紀念茶碗	百個	□
	三嶋茶碗	拾個	○
	はけ目茶碗	拾個	○
	三嶋鉢	五枚	○
	はけ目鉢	五枚	○
七月六日	仁清茶入　大小交　十五	取交十二個	○
	同　茶碗　十		
	刷毛目 三寸位三嶋 向付　三十	二十九個	○

	青　端反盃　大小入交り二十斗り	弐拾九枚	○
	シヤム盃　大小入交り二十斗り	九枚	○
	薄形□向付　三十斗り		
	青　笛付水滴　十五	九個	△
	祖翁像　三十五丁	三十六個	⊖
	青　向う獅々香炉　六個	三個	⊖
	古帰紀念龍付茶碗	三十九個	○
	喜ノ茶碗	四拾個	○
	古九谷向付皿　取交	五拾枚	○
	青瓷　立像釈尊	二個	△
	同　布袋置物	三個	△
	同　湯切角台	三枚	△
	絵高麗徳利	弐拾本	□
	同　酒呑	拾一個	□
	中小間　袴腰香炉	十二本	□
	紅魚付鉢	九枚	○□
	皿の種型	二個	⊖
	青瓷　角鉢	二個	⊖
	切立紅魚香炉	八個	□
	東福寺香炉	十弐個	□
	中　袴腰	十個	○
	鐵鉢火入	参拾九個	○
	白雁香合	拾一個	△
七月二十七日	切立火入　正味十五本	弐拾個	○
〃	大中　袴腰香炉　二十	二十個	○
〃	見本分より深ク　六拾	六拾枚	○
〃	長角香炉　五本	参個	△
〃	双絵皿　二十五	三拾枚	○
〃	白瓷　鉢盃香炉　五ツ△	三個	○

〃	白瓷　共蓋香炉　三ッ△	二個	○
〃	六角茶碗　五十	四拾七個	□
〃	三島水指　六個		
〃	青瓷　水滴　六個	六個	○
〃	白瓷 拾本	十本	○
〃	白瓷 白瓷　十本△	九本	○
〃	古九谷形向付　五十 取交ゼ五拾枚		△
〃	三島鉢　経六寸　高三寸　拾枚		
〃	座像達磨　五ッ	五個	⊖
〃	古帰紀念茶碗	拾個	□
〃	具利香合	廿個	□
〃	同　布袋置物	三個	△
〃	此形水指	六個	○
	六寸五　端反鉢	十四枚	○
	白瓷　岩上観音	三個	⊖
	福寿硯型	一個	⊖
	白瓷　観音　大	三個	△
	青瓷　獅子香炉　小	四個	△
八月十八日	染付小皿	三十四枚	○
	伊賀耳付　尺斗り　花　入五本	四本	○
	布袋香炉　三ッ	四個	△
	獅々 三		
	中　袴腰　二十	拾一個	○
	湯呑　寿字ノ入　二十	二十個	□
	水馬入盃　六枚	五枚	○⊖
	大中　十　目高付香炉	四個	□⊖
	千鳥　十	十個	□

	桃香合　二十	二十五個	⊖
	端反盃　二十	十九枚	○
	尊式花入　六本	七本	○
	袋鼠香合　二十	二十一個	⊖
	九谷花入　拾本　　尺八寸七寸取交	拾五本	○
	九谷向付取□　五十	弐拾枚	△
	硯桃□形　十	拾壱枚	⊖
	龍耳花入　十	拾本	□
	大袴腰　六ツ	拾個	○
	尺三　尊式花入	三本	○
	袴腰香炉　中小ノ間	九個	□
	驛路鈴形掛花入	三本	△
	龍模様古稀茶盌	三十七個	○
	白　白雁香合	一個	△
九月六日	龍耳　七寸　二十本	二十本	□
〃	中　袴腰　十五本	十八本	○
〃	環耳　八寸　八本	十二本	○
〃	桃硯　八枚	拾枚	⊖
〃	中観音　白じ　五個		
〃	大観音　白じ　五個		
	角　算木花入　六本	六本	⊖
	白じ　大花入　五本		
	白じ　かなへ形　小　拾本		
	鳥入子鉢　拾枚	拾壱枚	○
	わんたんめん鉢　五枚		
	ふてい置物　五ツ	六個	△
	三嶋茶碗　十五		
	驛路鈴掛花入	二本	△
	銭張り茶碗	弐拾個	□

	具利香合　中小	弐六個	□
	青磁　魚付香炉	弐個	⊖
	四本　白瓷	四本	○
	袴腰　中　十本	十一本	□
	魚付香炉　十	十二個	⊖□
	三島鉢		
	立像　五	五本	△
	座像　五		
	桃硯　十	十枚	⊖
	尺三　尊式花入　七本		
	葉形盃　四十	参拾六枚	△
	貝形		
	鉄鉢形香炉　大十　小十		
	染付貝模様小皿	三十二枚	⊖
	青瓷　算木御紋章附香炉	六個	○
	同　千鳥御紋章附香炉	九個	○
	同　袴腰御紋章附香炉	八個	○
	同　同御紋章なし	二個	○
	同　環耳算木御紋章附花生	二本	○
	同　環耳御紋章付花生	三本	○
	同　端反盃	九枚	○
	同　碗形盃	八枚	○
	同　銭張り煎茶碗	拾四個	○
	同　紅魚附盃	五枚	⊖
	九谷　菊形向附	二十一枚	○
	同　菊形向附	十六枚	□
十月四日	尺遊環魚付　三本	五本 魚付　三本	○ ⊖
十月	酒呑小キ分　弐個	大小　七個	○
〃	福寿硯　十	九個	□

〃	白瓷　九寸　遊環花入　三本	二本	○
〃	〓　香炉　壱本	壱本	○
〃	白瓷茶盌　三十		
〃	陽紋鉢　青瓷　白瓷　二十	青瓷　十二枚	□
〃	火入　見本通り　□地　二十	二十一個	○
〃	袴腰香炉　小	十三個	□
〃	座像達磨　六	三個	⊖
〃	立像達磨　五		
〃	布袋置物　六	二個	△
〃	白瓷　観音　大小	大　三個	△
〃	角香合種型		⊖
〃	鉄鉢梅模様絵付	拾五個	⊖
〃	信樂　鉄鉢	五十個	□
〃	〈◊〉　形向付	二十四個	⊖
〃	白瓷　尊式花生　中	三本	○
〃	盆踊り置物　一組	一組	△
〃	青瓷　朝鮮皿	二十七枚	□
〃	同　袴腰　中	七個	□
〃	同　袴腰　中小ノ間	拾個	□
〃	同　龍耳花生　中	十本	□
〃	同　魚付香炉	三個	⊖
〃	染付　角香合	二個	⊖
〃	染付　雀香合	拾個	△
	三嶋　茶盌鉢取交ゼ	三枚鉢十二個	○
	三島　水指　三	三個	○
	夜学瓶掛　二	二個	○
	白磁　小観世音像	弐個	△
	中小間　袴腰　十		
	七寸　龍耳　十五		

	夜学瓶掛　是迄分より少々大い分三　大二個		○
	尺三浮□□　五	五本	○
	九谷　雀香合　十		
	同　角香合　十	六個	⊖
	⬯　皿　三十		
	夜学ヲトシ付　五	四個	○
	環耳尺　十	十本	○
	湯呑　二十	二十個	□
	抹茶碗　二十	二十四個	□
	酒呑　二十	二十個	□
	シヤム鉢	十一枚	○
十月	九谷小皿	弐拾三枚	○
〃	信樂鍋	弐拾四個	○
〃	尊式　尺花生	五本	○
〃	鳳凰耳花生	六本	○
〃	雀香合	二十二個	⊖
〃	菊形向付染付	拾枚	⊖
〃	信樂鍋絵付	七個	⊖
〃	具利下香合	拾個	□
〃	夜学蓋置	拾五個	□
〃	龍抹茶碗	拾五個	□
	桃香合　小し分　六拾個	五十七個	△
	□瓷　雀香合　□□分　十		
十一月	⬯　硯　十	三枚	⊖
〃	桃水注　十	六個	△
〃	遊環紅魚香入　三本	三本	○⊖
〃	紅魚香炉　十	五個	□⊖
〃	東福寺　十	九個	□
〃	獅子香炉　十	五個	△

〃	中　袴腰　十	拾二個	□
〃	小芦□香炉　十	拾一個	□
〃	浮牡丹　三本	弐本	○
〃	白瓷　尊式花入　尺一分　三本		
〃	同　三足香炉　十		
〃	角香合	九個	⊟
〃	尺一寸　花入　三	取交　三本	○
〃	銭土瓶　三	三個	○
〃	菊形向付染付	五枚	⊖
〃	鉄鉢梅模様絵付	三十個	⊖
	抹茶碗	二十個	○
	水指　二	二個	○
	青じ　釈尊　三本		
	浮牡丹　八寸分　十	十一本	○
	水鳥香炉　十	拾個	□
	桃硯　十	拾壱枚	⊖
	東福寺　十五	十二個	□
	紅魚鉢　十	三枚	○⊖
	からず　五	五個	△
	なまず　三		
	六寸　盂　十	拾二枚	○
	鳳凰耳　六本	六本	○
	青じ　岩上観音　五ツ	参個	△
	青じ　布袋香炉	一個	△
	盃	三個	○
	岩崎氏せん茶碗	二十七個	○
	端反鉢	十一枚	○
	中　袴腰	十二個	○
	香炉	十二個　三個魚付	○

	鶏香合	参百個	□
十一月	獅子印材型取り	——	⊖
〃	獅子印材	三個	⊖
〃	鉄盃絵付		⊖
〃	芭蕉翁像	拾一個	⊖
	石人形手鉢	十二枚	○
	青瓷　人形手鉢	四枚	○
十二月二日	大　白瓷観音　五個	参個	△
	青じ　岩乗り観音　五個		
	鼠茶盌　五個	八個	○
	小　水指　三個	四個	○
	雀香合　十	六個	⊟
	青じ　酒呑　五十種々	二十五個	□
	九谷　尺斗　花生　五本	六本	○
	紅魚鉢又蟹　十五枚	九枚	○⊖
	角耳紅魚香炉　十	拾二個	⊖□
	青じ　湯沸シ　三個	三個	○
	白瓷　三足香炉　十	五本	○
	同　環耳　尺三　三本	二本	□
	同　八寸　三本	二本	○
	同　尺　尊式　三本	取交　二本	○
	九谷　小皿　四十	弐拾八枚	○
	青　箸置	拾五個	⊟
	同　中小間　袴腰	弐拾二個	□
	小袴腰首　長六個まぜ	弐拾五個	□
	青瓷　紅葉形墨台	拾一個	△
	九谷石　角香合	四個	△
	青瓷　立像観音	三個	△
	同　無地環耳花生	尺二四本	○

	同　牡丹模様瓶掛	参本	○
	倶利香合	拾八個	□
	鳳凰耳八寸花生	十本	□
	青瓷　長方形角硯	五枚	△
	大袴腰	十五本	○□
	信樂人形手茶わん	十八個	○
十二月十四日	青じ　蟹付紅魚付鉢　拾枚	八枚	○⊖
	尺位　遊環花入　五本	六本	○
	青じ　切立水指　四本	六本	○
	七寸　端反盃盃一枚	四枚	○
	鶉斑紋鉢　鉢六枚		○
	六寸　端反鉢　六枚	十二枚	○
	雀香合　十	六個	⊟
	三拾枚		
	岩上観音　五個	三個	⊖
	桃硯　十	七枚	⊖
	魚香合　十		

大正拾年辛酉一月四日目出度書初

一月四日	青じ　紅魚水指　五	五本	○⊖
〃	立像観音　四	参個	△
〃	紅魚　大小香炉　十	八個	□⊖
〃	楓葉墨台　十	拾個	△
〃	鶏香合　二十	拾九個	□
〃	紅魚鉢　六	六枚	○⊖
一月十六日	九　角香合　二十	七八個全十五	⊟
〃	同　皿　四十	弐拾枚	⊖
〃	同　丸小皿　四十	——	

一月十日	九　花入　六	六本	○
〃	鉢　六寸　六	拾枚	○
〃	青瓷　倶利地香合	拾四個	□
〃	同　無地水指	四個	○
〃	同　蕨付水指	弐個	○
〃	同　袴腰香炉　中	五本	□
一月十四日	同　桃模様茶碗	弐十六個	□
〃	同　獅子印材　三個	二個	⊖
〃	白童子　二個	二個	⊖
	手桶青じ水さし　竹手　三個	四個	○
	徳利　菱形　十	十本	□
	盃　五十	四十六個	□
	算木香爐	九個	□
	鳥子煎茶盌　五十	——	
	袴腰　大中間香爐	六個	□
	七寸　端反鉢　七	十枚	○
	瓶掛　取まぜ　七	六個	○
	達磨立像　五	二個	△
	同　座像　五	五個	⊖
	乾山角皿　大小　七十枚取交ゼ	六十五枚	△
	鳥ノ子煎茶碗　二十斗り	三十五個	□
	六	五個	□
	青じ　手桶　五	——	
	鳥の子鉢　五	八枚	○
	白　大観音像　四	三個	△
	三島花生	一本	○
	同　鉢	三個	○
	同　土茶碗	五個	○
	中袴腰香戸	二十	□

一月三十日	白瓷煎茶碗　百個	四拾個	□
	紅魚香爐 六ツ	六個	⊖□
	千鳥　十	拾個	□
	三ツ具足　五ツ組	六ツ組	□
	紅魚遊環花入　三本	四本	○⊖
	白瓷　尊式花入　大の分　四本		
	同　小の分　五本		
	ほふら　五組	三個	○
	鳥の鉢　三		
二月十二日	たんじお佛　五	五像	△
	蓮葉硯	五枚	△
	杯十弐組 白瓷さかづき		
	鯉耳香爐 五個	六個	○
	筆架 二	五個	△
	羽衣手鉢　三枚	十枚	○
	水次　二本	四個	○
	三嶋茶盌　七枚		
	蓋置　十	十個	□
	丸形硯　五ツ	五個	○
	鶉斑紋盆茶碗交　十	十二個	○
	同　湯呑	一個	○
二月二日	青瓷　三味線胴花入	三本	○
	乾山角皿大小　絵付	大　拾五枚 小　三十枚	⊖
	青じ六寸 三十	三十五枚	○
	青じ煎茶盌　五十	六拾個	□
二月十五日	桃水指　六	五個	△
	童子　三ツ	二個	⊖

	八角茶盌　三十	五拾個	○
	白じ　かなゑ式共蓋香炉　二ッ		
	白じ　八寸遊環花入　十	二本	○
	白瓷　尊式花生　二	拾本	
	鳥の子花生　十	五本	○
	角硯　五	六個	⊖
	羽衣手鉢　十		
	獅子香炉　十	三個	△
	伊賀花生水指　取交　五	五本	○
	青じ　尺二　紅魚　五本	五本	⊖○
	陽紋盆　拾枚	拾六枚	○
	袴腰中　但シ仕上ニ充分注意　十	拾三個	□
	耳付青じ　切立火入　十六	取交ゼ弐拾七	○
	九谷ノ分	大小取交ゼ弐十二本	
	徳利　十五	大小取交ゼ弐十二本	○
	九谷　火入　六	八個	○
	角香合　十	三個	⊟
	青じ物		
	丸硯　五枚	四個	○
	紅魚小香爐　六ッ	三個	□⊖
	紅魚鉢　拾枚	拾一枚	⊖○
	手あふり　紅魚付　三ッ	参個	⊖○
	白瓷ノ分		
	尊式大花入　三本		
二月	青磁　大煎茶碗	弐拾四個	□
〃	五寸 皿	拾九枚	○
〃	青磁　硯屏　大	三個	△
〃	同　硯屏　小	四個	△

〃	龍耳　大中	二十本	□
	鶉斑紋鉢	四枚	○
	同　茶碗	四個	○
	同　茶入	五個	○
	同　香合	三個	○
	袴腰　中	八個	□
	袴腰　中小間　小	拾七個	□
	千鳥香炉	拾個	□
	鶉斑紋香炉	弐個	○
	交趾　馬香合	拾三個	⊟
	青磁　手あぶり　但し無地	弐個	○
	九谷　香炉	拾個	○
	同　丸小皿　参	三十五個	○
	雀香合	四個	⊟
三月七日	青じ　夜学瓶掛　八ツ	九個	○
	青じ　瓶掛 弐ツ	弐個	○
	蓮生　取ませ十本	十八本	□
	六寸　碗形盃　拾枚	九枚	○
	中小ノ間　袴腰	八個	□
	小ト中取ませ　十	十一個	□
	桃硯　十	拾個	△
	九谷　三人形組　三組		⊖
	芦□香炉　十	十一個	□
	人形手盆　六枚	九枚	○
	千鳥香炉	二十個	□
	算木香炉	九個	□
	東福寺香炉	五個	○□
	伊賀花生　大小	八本	○
	同　水指	弐個	○

	置燈炉	一個	○
	利休像	三個	⊟
	獅子香炉	六個	△
三月十七日	白瓷観音　五個　大小	四個	△
	盆踊三人子供　五組	一組	⊖
	唐子人形　三組	弐個	⊖
	繩耳香炉　十	九個	□
	遊環尺花生　八本	十本	○
	掛花入　十	七本	△
	夜学香炉　十	七個	□
	角耳香炉　十	八個	□
	鳥の子□盃　十	十枚	○
	八寸環耳花入　十	拾壱本	○
	○　乾山皿　三十	四拾五枚	□
	□　小さら　三十	参拾枚	△
	白瓷　尺遊環	二本	○
	同　小花生　取交	九本	○
	土釜	一個	○
	青磁　中袴腰	十五コ	□
	御紋章付小香炉　三	六個	□
	紅魚付角耳香炉	弐個	□⊖
	青磁　蘭鶏香合	六十個	□
四月二日	見本　金蘭手鉢　上石　拾五枚	二十二個	○
	青瓷　魚付火鉢　三ッ對	——	○
	同　紅魚鉢　五枚	六枚	□⊖
	しやむ鉢　五枚		——
	青じ　隅手盃　十	拾一枚	□
	三島刷毛目茶碗　二十取交		○
	青じ　六寸鉢　十	五枚	□

	魚の子煎茶碗　五十	五拾個	□
	タケ　 　青じ　六寸　二十	二十個	□
	桃水注　六本	六個	△
	桃香合　十五	二拾四個	⊟
	白瓷　一尺一寸　尊式花入	五本	
	共蓋香炉　白瓷	弐個	○
	かなへ形共蓋香爐　白瓷	七個	○
	三島火入　十		
	三島鉢　取交	十一枚	○
	同　水指　取交	四個	○
	大袴腰	六本	○
	九谷　雀香合	拾五個	⊟
	鳥之子座像釈尊	拾個	△
	盆踊三人子供	二組	⊖
	唐子置物	一組	⊖
四月十二日	しやむ鉢　六枚	六枚	○
	金蘭手鉢　六枚		
	釈尊出産		
	小判硯　十枚	九個	⊟
	きじ　五ツ	参個	△
	七寸瓶掛　弐個	弐個	○
	中小袴　十五	中　拾九個 小　九個	
五月二十日	桃硯　十	五枚	△
	わらひ耳水指　二個魚付	五個	⊖○
	四寸五分皿　三十	三拾個	□
	三寸皿　三十	参拾個	□
	九谷皿　 　三十	五十枚	⊟
	九谷角香合	拾二個	⊟
	とび花生	拾本	○

	砧形花生	四本	○
	紅魚角耳香炉	五個	□⊖
	白じ　五寸香炉	二個	○
四月二十五日	三ツゲソク　二組	二組	□
	尊式小花入　八本	八本	□
	中小ノ間　袴腰　十	拾壱個	□
	青じ　未茶碗　十	拾弐枚	□
	岩上観音　五個	五個	△
	しやむ香合	五個	○
	湖東焼	四個	○
	御用品香合	六個	○
	白磁　聖徳大子像	四個	△
	木米寫酒呑	百四拾個	□
	青磁　倶利香合　大小取まぜ	廿壱個	○
	同　夏目型茶入	拾個	○
	尺参寸　無地環耳花入	参本	○
	大浮牡丹花生　尺五寸	弐本	○
五月十五日	丸形　大浮牡丹花生	二本	○
	青じ　見本向付　五拾個	五十八個	○
	同　見本火入　拾五個	拾五個	□
	鉄盃火入　十個	十一個	□
	白瓷　尊式花生　尺三寸	二本	○
	同　大観音像　五個	五個	△
	紅魚香爐　十個	七個	□⊖
	九谷徳利　二十	弐拾参本	○
	同 香爐　十五個	弐拾九個	○
	香合　十		

	青じ 紅魚　四本	参本	○⊖
	芦□香爐　大小　二十	二十三個	□
	鶉斑紋鉢	五個	○
	鶉斑紋茶入	九個	○
	鶉斑紋香炉	六個	○
	鶉斑紋茶碗	五個	○
	鶉斑紋蓋置	一個	○
	青磁　達磨香合	拾四個	△
	同　桃香合	拾二個	△
	同　桔梗型香合	拾二個	△
	信樂　雉子香炉	三個	△
	紅魚付酒呑	六個	□
	同形無地	十三個	□
	青磁　鉄鉢火入　大	拾九個	□
	同　飛花生	弐本	○
	同　急子	十個	○
	九谷　小花瓶	六本	○
五月廿五日	千鳥香炉　十	八個	□
六月七日	香合達磨　二十	弐拾個	△
	同　入交り　香合色々　二十	十八個	□
	青瓷火入 五ツ籠目	六個	□
	□手水注　五ツ	六個	□
	龍耳　入交り　十五本	十七本	□
	鳳凰八寸　八本	十本	○
	三人組　弐	弐組	⊖
	夜学　六本	六本	○
	同　小四本	四本	○
	中小　袴腰　二十五	二拾二個	□

	鉄盃香爐　十	拾九個	○
	乾山皿　大小　三十枚	三拾枚　小大	⊟
	雀香合　十五	拾六個	⊟
	端反盃　六	拾枚	○
	上石煎茶わん	拾七個	○
	同　急須	二本	○
	同　向付	弐拾九個	○
	青磁　紅魚香炉　取まぜ	八個	□⊖
六月十六日	白磁　聖徳太子像	弐個	△
	鳥之子　釋尊	拾個	△
	耳掃除唐子	一個	⊖
	湯冷	五個	○
	具利小香合	十四個	○
	小中間　袴腰	十二個	□
六月十二日	青瓷　切立香炉　五ッ中位紅魚 金眼入り　金眼五個　メヽジヤコ	参個	□⊖
	大国殿　六個		
	白瓷　急須　十本		
	□□　四個	五個	△
	鳳凰耳　一尺花入　五個	六本	○
	三嶋茶碗　十	十一個	○
	同　筒茶碗　五	五個	○
	三人組　三組		
	袴腰　中小　十五	二十個	□
	六寸五分位　龍耳　十本	十一本	□
	陽紋盃　十	十枚	□
	角耳香炉　十	拾一個	□
	角蓋置　六個	七個	⊟
	布袋香炉　五ッ	三個	△
	上石七寸斗　鉢　六枚		

	硯□交せ　十	取交ぜ　十枚	
	はけ目	十個	○
	上石急須	五個	○
	同　煎茶わん	廿八個	○
	青磁　蘭香合	四拾個	□
	利休像	三個	⊖
六月二十八日	青瓷　尺二花生　正味二	三本	○
	菊象眼花生　二		
	鉄盃火入　十	拾一個	□
	徳利刷毛目　十五		
	三島徳利　十		
	東福寺香炉　十	五個	□
	白瓷　無地八寸盆　二	三個	○
	龍耳花生　九寸　三	四本	□
	環耳花生　三	三本	○
	青瓷　魚耳香炉　八ツ	八ツ	□
七月八日	九谷　二人人形　三ツ	弐個	⊖
	紅魚花人 飛形　二本	二本	○⊖
	尺八寸　鳥の子花瓶	二本	○
	鳥の子　尊式耳付	一本	○
	畫の具皿	三組	○
	小花生	十本	○
	繩耳大瓶掛	二個	○
	白瓷　かなへ形香炉　大小	八個	○
	同　急須	二個	○
七月七日	九谷石　白童子置物	三個	△
〃	同　鎧之袖	二個	△
	こんろ　取交	七個	○
	赤石　色見酒呑	三拾個	□

七月十日	信樂　雉子香爐	四個	△
七月十二日	なんばん　五本	八本	□
〃	小龍耳　十本	九本	□
〃	中袴　十五本	拾弐個	□
〃	小袴　十五本	拾参	□
〃	聖徳太子　四像	参個	△
	切立小香炉　目高く　拾個	九個	□⊖
	中湯呑　二十	弐拾五	□̇
	東福寺　十五本	拾五本	□
	角鉢　十枚	三枚	⊖
	桃香合　十五	二拾個	⊟
	達磨香合　十五	拾五個	⊟
	大國　五本		
	誕生佛　五本	三像	△
	龍形花生紅魚　六本	六本	○⊖
	紅魚鉢　六本	五本	□⊖
	見本　六寸皿　二十枚	二十七枚	○
	鳥の子　煎茶碗　五十		
	耳掃除唐子	三個	⊟
	象眼徳利	三本	○
	九谷　小徳利	二拾九本	○
	九谷　香炉	拾六個	○
	九谷　丼	弐個	○
	中袴腰	拾九個	□
	大袴腰	六個	□
	金眼切立紅魚香炉	参個	□⊖
七月二十八日	龍耳　一尺二三寸ヨリ五寸迄込み	五本	
	竹□扨立　五本	六本	□
	角蓋置　十	十個	⊟

	三島茶盌　夏冬筒十個斗り		
	地土黄土合□大小ハン子ラ　十	五個	△
	フチ龍□□硯　五個	五個	△
	土向附	二十八個	○
	ボーブラ	八個	○
	走嵐山花生	二本	○
	走嵐山茶わん	弐拾五個	○
	上石　水指	四個	○
	上石　六寸鉢	四枚	○
	絵ノ具皿	弐個	○
	鍋絵付	拾五個	⊖
	角筆洗	四個	⊖
	鯉振り彩色　大小		⊖
	達磨香合	拾六個	⊟
八月八日	凉爐台	七個	△
	蓮葉形硯	六個	△
	青磁　水指	八本	○
	土焼　片口	拾個	○
	青磁　岩崎茶碗	拾六個	□
	同　梅鉢紋入り香炉	壱個	○
	同　梅鉢紋入り香炉	壱個	○
	サツマ獅子風門こんろ	五個	○
	同　ボーフラ	五個	○
	青瓷　御珠數	九組	△⊟
	青じ　三ツ具足　一組	一組	□⊟
	シロキ　青じ　一ツ		
	紅魚盃　三枚	六枚	○⊖
	青瓷　水指　弐個	二個	○
	サツマ鳥の子煎茶碗　三十		

	中小合　袴腰　二十	拾四個	□
	筒茶　五個		
	瓢形ふり出し　十五	二十六本	○
	九谷　湯呑　二十形入	五拾個	⊖
	青じ　酒呑　二十	二拾個	□
	伊賀水指　三ッ	三個	○
	同　花生　三ッ	五本	○
	形　九谷香合　二十斗り	拾三個	⊖
八月十七日	天形茶碗　十	十二個	○
	白瓷　観音像　小し分　五	三個	△
	八寸斗り 青じ　御酒入レ二本	四本	○
	豆小皿　青じ 五十	五拾六枚	□
	陽紋盃　十	拾四枚	○
	青じ　香合入交り　三十		
	朝鮮四寸五分皿　五十	五拾枚	□
八月二十日	桃香合	二拾個	⊖
	三嶋徳利	十八本	○
	同　茶わん	四個	○
	菊形水指	六個	○
	青瓷　浮牡丹尺一寸花瓶	二本	○
九月五日	白瓷　茶碗　五十六個		
	青じ　茶碗八角　八十個	九拾個	□
	角耳紅魚香爐　六個	五個	○
	岩上観音　五	三個	⊖
	千鳥香爐　五ッ	七個	□
	紅魚香炉目入　五個	五個	⊖○
	同　目ノ入らぬ　十　小魚ノ分	四個	⊖○
	こんろほ□分台　七組	四組	○⊖

	〒 □□が形向付　二十	三十五個	○
	大袴腰　八ッ	拾個	△○
	五寸五分皿　十五		
	新花生型取り		⊖○
九月四日	涼爐台	四個	十七
〃	御珠數	百個	十七
〃	漢窯五足香炉	拾二個	□△
〃	漢窯花生	七本	○△
	湖東寫花生　上石分	七本	△
	同　　九谷分	七本	△
	青磁　角杯	拾個	⊟
	同　小判形硯	六枚	△
	青磁桝形杯	七百五拾個	⊖□△⊟ 十七
	信樂天目茶碗	拾七個	○
	青磁　盃　取交	百個	○
	同　筆指	二個	⊖○
	紅魚鉢	五枚	⊖○
	御用品香炉	二拾九個	○
	桜花付香炉	二十六個	○
九月十一日	白瓷　観音　大	三個	△
〃	青瓷　立像釋尊	二個	△
〃	青瓷　角形杯	百五拾個	⊟△ 十七
〃	鳳凰耳尺花生	参本	○
	新形浮牡丹花生	八本	○
	紋付香炉	拾弐個	○
	紋付花生	弐本	○
	紋付高ツキ	拾一個	○
	羊香合	参拾個	○

	桃香合	七ツ	十七
	九谷　雀香合	拾個	廿
九月二十三日	青瓷　雀香合	弐拾個	廿
	御紋付香炉	拾個	□
	金蘭手向付	弐拾壱枚	○
	同　五寸五分鉢	拾枚	○
	しやむ鉢　大小	五枚	○
	サツマ天目茶碗	拾二個	○
	上石香炉	四個	○
	同　急須	二本	○
	茶キン筒	二個	○
	バシザシ	二個	○
	ゴボシ	二個	○
	角水鉢	一個	○
	新型浮牡丹環耳花生	二本	○
	菊形水指	五本	○
	青瓷　耳付水指	二本	○
	青瓷　立像達磨	三個	△
	白磁　観世音像　小	三個	△
九月三十日	青瓷　桃形之杯	百拾五個	△廿
〃	信樂　雉子香爐	三個	△
	上石　拭布入	三個	廿
	芦□香炉　小	五個	□
	袴腰中香爐	拾弐個	○
十月四日	環耳浮牡丹　六本	七個	○
	サツマ土天目　十五枚	弐拾五個	○
	龍耳　十本	拾本	□
十月九日	風字硯　十枚	十枚	廿
	中大間　袴腰入交　二十	弐拾個	□

	獅々印材大ノ部　三個	二個	⊖
	青瓷　坐像達磨	三個	⊖
	子持観音像	五個	⊖
	九谷　盆踊り三人形	一組	⊖
	青瓷紅魚香炉	二個	⊖□
	同　角耳香炉　大中	五個	□⊖
	同　切香炉　小分目高目金入	六個	□⊖
	ひつじ香合　五個	六ツ	○
	紅魚鉢　　白金眼五枚　目ナシ五枚　金五枚		□⊖
	青じ　浮牡丹尺弐寸　五本	六本	○
	小袴腰　十本	拾一個	□
	千鳥　香炉　十	十八個	□
	三嶋焼茶碗鉢　拾五　　鉢四枚　茶碗七ツ		○
	三嶋花入	弐本	○
	三嶋水指　入り交　七個	弐個	○
	急須湯冷　但茶碗五組		○
	九谷　三人人形　一組		⊟
	拭布入　九谷	六個	⊟
	九谷香炉	十五個	○
	九谷小皿	五拾六枚	○
	中袴腰	六個	□
	技藝天の臺	一個	□
	上石　香合	一個	○
	同　蓋置	二個	○
	同　火入	四個	○
	九谷すみ切角臺	二枚	○
	上石　急子	五個	○
	同　煎茶碗	弐拾	○
二十六日	浮牡丹切立火鉢	弐本	○

尺五花入紫田写見本

夜学火鉢　□小ノ分　三本	五個	○
千鳥　拾個	拾七個	□
鉄盃　二寸弐分　五分　十　盃	十二個	□
尺六花入ガンマンジ形	四本	○
□□□　三	四個	○
キジ　三	参個	△
石□焼□香合　二十	拾七個	□
九谷皿　四十	二十個	⊟
九谷香炉　大小中　二十	二十六個	□
芦□香炉	拾七個	□
中袴腰香爐	弐拾四個	○
小中間　袴腰香炉	拾参個	○
紅魚目ダカ鉢	四枚	□⊖
信樂　土水指	弐個	○
上石　拭布入	二個	⊟
青磁　福壽硯	六枚	△
丁干龍模様之硯	四枚	△
同　倶利地香合　大小	三拾四個	○
同　裏菊模様之蓋物	弐個	○
青瓷　桃型之杯	弐拾五個	十七
同　爵杯型之香爐	弐個	⊟
同　犬香合	弐百五個	□
桃雀香合取交ゼ	弐拾五個	十七
青瓷　柴田型花入　八寸	八本	○
サツマ抹花碗　□火入	拾六個	○
青瓷　鳳凰耳　一尺花入	六本	○
小判形硯	十四枚	⊟
上石犬香合	百個	⊟

十一月二十一日	九谷　養老置物	五個	△
	青煎　煎茶碗　三十	参拾五	⊙□
	九谷　小皿		
	こんろ　はさ形　四ツ	大小　八個	○
	燈台　六枚		
	きじ　四ツ		
	桃形硯　六枚	八枚	㊐
	小ばん形硯		
	九谷皿　三十		
	青じ　豆皿　五十	参拾個	○□
	白金目紅魚香爐　五ツ		
	四寸袴なし　七ツ	拾五個	○
	夜学火鉢　三ツ		
	紅魚香爐　大小	拾個	○
	座像達磨	三個	㊐
	東福寺香炉	六個	○
	鳳凰耳　八寸	四本	○
	青磁　爵杯型之香炉	四個	㊐
	青磁　桃型之杯	二十四個	㊐
○今年中急そく分			
	六寸五分　端反鉢　拾枚	拾壱枚	○
	中小の間　袴腰　十五枚	十四個	○
	算木　経七寸　二ツ	弐個	○
	陽紋鉢　十枚	六枚	○
	丸硯　弐枚	四枚	○
	青磁達磨香合	二十五個	㊐
	九谷耳掃除置物	二個	㊐
	九谷花生	五本	○
	同　徳利角	五本	

(1)

(2)

(3)

(4)

(5)

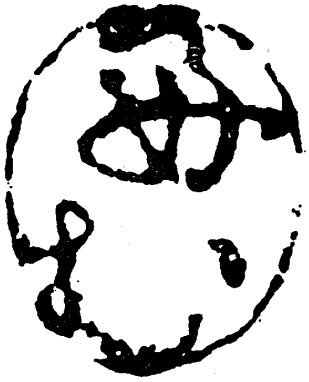
(6)

(7)

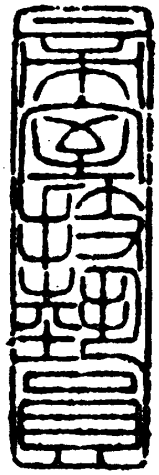
(8)

(9)

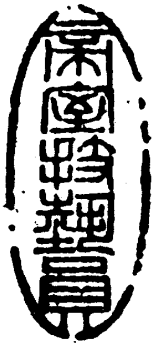
(10)



(11)



(12)



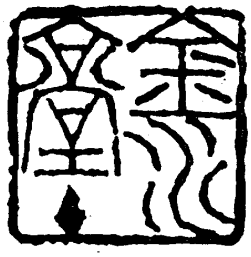
(13)

(14)

(15)

(16)

(17)



(18)

(19)

(20)

(21)

(22)

(24)

(25)

(23)

(26)

(27)

(28)

(29)

(30)

(31)

(34)

(33)

(32)

(37)

(36)

(35)

(38)

(39)

(40)

(41)

(42)

(43)

(44)

(45)

(46)

印 譜 説 明

(1) 石印，丁巳七月鉄城刻

(2) 黄楊印，戊午夏日魯山人作〔箱書〕是柴田膽山君所見贈諏訪蘇山君者也
大正九年五月木村得善識

(3) 石印，〔箱書〕従呉大澂説文古籀補鉄城刻

(4) 石印，鉄城刻

(5) 石印，鉄城刻

(6) 石印，乙卯正月　青木古嵩氏被贈石印　仝氏刻

(7) 石印，青木古嵩氏被贈石印　仝氏刻

(8) 黄楊印

(9) 銀印，石禪刻，久邇宮王府賜金印於諏訪蘇山翁余因仿造焉㠯贈翁云
大正九年一月〔箱書〕是黑田冲毆君所見贈諏訪蘇君者也　大正九年五月木村得善識

(10) 金印，久邇宮家下賜金印　秦蔵六造

(11) 陶印，蘇山作

(12) 石印，鉄城刻，大正丁巳秋日諏訪蘇山老兄見恵手製花缾其作
精工愛玩不措乃以拙刻石印爲謝所謂報之以木爪者也　鉄城訳

(13) 石印，戊午秋日鉄城刻

(14) 銅印，蘇山作

(15) 石印，丁巳十月湖城刻

(16) 石印，桑名鉄城氏被贈，同氏刻，鉄城仿漢印成此時戊午十一月

(17) 木印，精所刻〔箱書〕是石渡敏一博士高津鍬三郎学士
曩所見贈諏訪蘇山君者也　大正九年五月木村得善識

(18) 石印，鉄城戊午年作，同氏被贈

(19) 石印，戊午十一月鉄城仿古，精斉の号は妙法院の村田寂順より明治の末頃贈られたという。

(20) 石印，魯山人刻，柴田膽山氏被贈

(21) 銅印，〔箱書〕李王家賜之銅印大正五年三月蘇山識，京城李王家美術工場造

(22) 石印，竹亭刻

(23) 竹根印，青木古嵩氏被贈仝氏刻

(24) 黄楊印，陶磁の作品に用い，大，小あり，これは小印である。

(25) 石印，竹亭刻

(26) 木印，石渡敏一，高津鍬三郎両氏被贈精所氏刻

(27) 石印，鉄城仿漢印成此時丁巳七月

(28) 石印，鉄城刻

(29) 石印，九鬼成海氏被賜寸碧氏刻

(30) 石印，富岡鉄斎刻

(31) 石印，九鬼成海氏被賜寸碧氏刻

(32)(33) 木印，朝鮮にて使用せしもの。

(34) 銅印，三宅長策氏被賜秀眞氏作連環鈕

(35) 石印，

(36) 石印，古嵩刻

(37) 竹根印，木村擇堂氏被賜同氏刻

(38) 仝上，金水堂の号は大徳寺松雲老師より作業場の銘として贈られしものという。

(39) 石印，丁巳八月鉄城刻

(40) 石印，鉄城刻

(41) 石印，丁巳冬日鉄城刻

(42) 金印，大正辛酉秋　秀眞　彩壺会

(43) 黄楊印，陶磁器の作品に用いた大印。

(44) 合金印，小幡茂氏被賜合金連環鈕印〔箱書〕大正九年庚申二月吉日
北野天満宮神判謹鋳矣茲其以餘金十一月上浣石禪作

(45) 仝上

(46) 石印，戊午孟冬鉄城刻

	くじやく香炉	三本	○
十二月十四日	袴腰　大中小入交り　三十		
	爵香炉　五ツ	六個	日
	きじ　十		
	子供二人唐子　四ツ		
	夜学香炉　六ツ		
	切立浮牡丹瓶かけ		
	鳳凰耳　五本	五本	○
	端反鉢　拾枚　六寸　五		
十二月二十一日	鎧之袖	三枚	日

人　　物

蘇山の為人については「蘇山臈影」に「君ノ逸事ト芸術」という文がある。これは蘇山の友人で主治医の木村得善は，永年ほとんど毎日のごとく蘇山と親交あり，その間平生見聞したことを記したもので，蘇山研究の好資料と思われるのでそれを紹介する。

君ノ逸事ト芸術

君ハ窯業界ノ偉人タルノミナラス他ノ芸術界ニ於テモ専門家ノ遠ク企及スル能ハサル技倆アリ以下筆ニ隨ヒ聞知スル所ヲ記サントス然レトモ固ヨリ是ヲ以テ君ノ心術ヲ盡スモノニ非サルナリ

○千古廢窯復タ其跡ヲ継ク能ハサリシ砧青磁ノ如キ君カ千辛萬苦意ニ獨創ノ譽ヲ贏チ得テ古窯ニ遜ラサルニ至リテハ誰レカ卓越ノ技倆ニ推服セサランヤ某博士近來砧青磁ト君ノ青瓷ト其釉藥ノ分析ヲ試ミシニ實ニ毫釐ノ差ナク所謂符節ヲ合セタルカ如シト（分析表諏訪家ニ在リ）

○古九谷ニ於テモ研鑽ヲ重ネシ爲メ製品ハ古窯ノ其レニ比シテ遜色ナシ昨年某博士珍藏ノ古九谷徳利ヲ某會ニ於テ石版搨ト爲セリ一日搨本君ノ家ニ郵到ス君一見笑ツテ云ク曾テ大聖寺ニ住セシトキノ自作ナリ敢テ世ヲ欺瞞スルノ意ニアラサリシモ人ノ欺瞞セラルヽヲ如何セント乃チ同一物ヲ造リテ某博士ニ贈ル博士見テ唖然タリト

○築窯ニ就テハ君カ夙ニ考案ニ依リテ改良セラル火燄ノ流走宜シキト燃料ノ節減著シキトニ在リ爾來全国此法ニ據ルヤ比々皆然リ而テ其誰氏ノ考案ニ成ルヤヲ知ルモノナシト

○釉藥ハ総テ自家研究ニ依リテ成ルモノヲ使用ス種類極メテ多シ一般陶業家カ他ニ釉藥ヲ仰キ其和合ノ何物タルヤヲ詳カニセスシテ漫然使用スルモノト全ク其選ヲ異ニセリ

○砧青瓷ノ如キハ釉藥ヨリモ基地ノ選擇ニ注意シ遂ニ一大成功ヲ致セリ

○君彫刻ノ手腕アルカ故ニ陶器ニ關シテモ彫型ニハ最モ妙ヲ得タリ是亦君カ成功ノ一ニ居ル

○東京ニ在リシトキ八十歳許ノ老婆ニ途ニ遇フ顔面手臂ノ皮膚皺襞ノ状脈管怒脹ノ態實ニ模型ニ於テ最良タルコトヲ想ヒ請フテ伴ヒ歸リ石羔ニテ型ヲ取リ厚ク禮ヲ遣リ歸シタリ其熱心ナル概ネ如此其型今猶ホ保存スト

○拈造ト彫刻トヲ問ハス動物ヲ模スルニハ其動物ヲ熟視シ了レハ一意製作ニ餘念ナク再ヒ動物ヲ顧ミス人之ヲ問ヘハ乃チ云ク形已ニ我心ニ會得セハ神ノ之ニ舍ランコトニ留意スルナリ若シ形ニノミ髣髴シテ神ナキモノハ所謂形而上ノ作品ヲ得ル能ハサルナリト

○初メ工芸学校教員タルヤ入学志望者常ニ少ナク之アルモ工芸ノ才ニ乏シキモノ多シ君乃チ自ラ小学校ヲ歴訪シ校長ニ謀リ各教室ニ就キ紙片ヲ各生徒ニ与ヘ紙撚ヲ爲サシメ巧ニ撚ルモノヲ選ビ本人並父兄ニ勧誘シ大ニ目的ヲ達セシコトアリ

○君ノ工芸学校ニ教鞭ヲ執ルヤ校ノ財政頗フル非ナリ故ニ待遇甚タ薄シ隨テ自ラ奉スル愈薄シ猶一部ヲ割テ薄資ノ俊才ニ給シテ成業セシ者二三ニシテ止ラスト

○学校ノ君ヲ遇スル甚タ薄ク而シテ授業科目ハ陶器ニ繪畫ニ彫刻ニ漆器ニ図案ニ自ラ喜ンテ専心徒ニ授ケリ

○同校在職中粘土手工ヲ案出シ型又ハ捻ニテ種々ノ動物ヤ草花類ヲ製作シ生徒ヲシテ娯樂中芸術趣味ノ進歩ヲ見ルニ至リタリ近年各地小学校科程ニ之ヲ加ヘタリ君實ニ四十年前ノ考案ニ出テタルモノナリ

○君徒弟ニ對スル頗ル厳ニシテ寛各其長ヲ見テ益之ヲ導ク質疑スルモノアレハ諄々誨ヘテ倦マス作業ノ進歩スルモノアレハ之ヲ賞シ勤勉ナルモノアレハ之ヲ賞シ苟モ怠慢ナルモノニハ毫モ假借セス若シ疾病アレハ之ヲ慰撫シ醫藥セシムルノミナラス日夕病床ヲ訪ヒ意ニ介スルコト甚シ

○君越前阪江港ニ在リシトキ宮内省ノ命ニ依リ李白ノ盧山觀瀑之姿勢ヲ爲セル身長丈餘ノ青繪焼陶像ヲ謹製シタリ吹上御苑ニ安排セラルト云フ今ヲ距ル實ニ四十余年ナリ

○君大聖寺九谷會社ニ於テ金剛童子體ヲ造レリ是亦非児ノ作ナリ往昔寛永年間九谷初代後藤才次郎作ニ係リシ同像ハ破損セリ依リテ之ヲ修繕セルモノト稱シテ今ニ之ヲ国寶ト爲セリ

○君郷里ニ在リシトキ大唐獅子陶像ヲ造リ第二回内国勧業博覧会ニ出品セシニ皇后陛下（昭

憲皇太后）ノ御覽ヲ賜ヒ御買上ノ御沙汰ヲ被フル然ルニ如依ナル機会ニヤ忽チ破損シテ十六片トナル依リテ同会ヨリ改作ヲ奏上セシニ補修セハ可ナリトテ遂ニ御用品ト爲ル蓋シ作ノ非凡ナル知ル可キノミ

○九谷陶業衰態ノ際君歌聖人丸像其他置物数品ヲ製出セシニ九谷ノ聲價頓ニ揚リ九谷産額ノ殆ント全部ヲ占メ忽チ同地産業ノ回復ヲ見ルニ至リテ高足弟子奥野某ヲシテ専ラ斯業ニ當ラシメ自ラ辞シテ他ニ移レリ

○是ニ於テ九谷ノ青絵釉藥ヲ使用スルコト年々多量ナリ君ハ竹内源三郎ノ名ヲ以テ其釉藥ノ全部ヲ製造供給セリ

○第二回内国勧業博覽会ニ君カ仁王ト地藏及角牴ノ陶像ノ如キハ其意匠ト製作トノ超凡ナリシヨリ九鬼男爵ノ歓賞セラルヽ所トナリ爾來知遇ヲ承クルニ至レリ

○今上陛下ノ東宮ニ在セシトキ伊藤博文公駿河ニ於テ徳川家康公ノ所持タリシ茶器酒器ノ漆銅曲輪陶器等ヨリ成リ輕便精巧ニシテ雅致アル作ナルヲ見テ之ヲ模倣シテ東宮殿下ニ獻セントノ之ヲ君ニ謀ル即チ之ヲ諾シ沐浴精勵將サニ成ラントスルトキ哈爾賓ノ兇変アリ公之ヲ観ルニ及ハサルノミナラス遂ニ獻納シテ台覧ノ榮ヲ荷フ能ハサリシハ遺憾何ソ限ラン

○君錦光山ニ在リシトキ君カ技能ノ敏捷ニシテ精妙ナル他職工等ノ猜忌ヲ招キ君ヲ陷擠セントシ一日牡丹浮模様花缾ノ製造ニ就テ競技セムト語レリ是ニ於テ君單身十指ヲ揮ヒ一定時間ニ八個ヲ造リシニ他ノ職工数人協力シテ僅カニ二個ヲ作リシノミニテ衆皆舌ヲ捲キ是ヨリ復タ言フモノナカリシ

○君ハ精勵ト研究トヲ以テ無上ノ娯ト爲ス毎朝四時起床シ通常人ノ朝食迄ニニ已ニ半日ノ時間ヲ得又毎夕點燈後二三時間ヲ数回ニ睡リ家人深夜就寝セントスレハ之ヨリ翌暁四時ニ至ルマテ夢寐全カラス枕上種々ノ考案ヲ運ラシ若シ心ニ会得スルアレハ直チニ記シテ明日之ヲ実驗スルヲ例トス縱令ヒ病魔ノ侵ス所トナルモ枕頭實驗スルヲ以テ自ラ病苦ヲ慰ムル等顚沛タモ忘ルヽ能ハス

○楽焼ハ即興トシテ來客ニ揮毫セシメ直チニ瓦斯ヲ應用シテ焼キ揚クルナリ且從來釉藥ハ鉛分ヲ含有スルカ故ニ君ハ全ク之ヲ用ヰス

○絲瓜ノ懸花挿ヲ製セシコトアリ長サ二尺餘中身皮ノ破潰シテ内部ヲ露出スルノ状ヲ呈ス其内景繊維ノ縱横錯綜シテ而モ條理自ラ整然タル實ニ眞ニ逼レリ其繊維ヲ織成スニ當リ豫メ實物ニ就テ十分研覈シタルヲ以テ此名品ヲ造レルナリ此繊維ノ縱横網羅数千條窯中高熱ニ遇フモ一ノ断裂ナク隣繊トノ癒着ナク深サ約二寸ニ達スルモ錯綜ノ状ヲ網眼ヨリ透見スルヲ得如

此モノ三四個ヲ造レリ其精力想像ノ外ニ在リ

○初メ白瓷青瓷ノ製品共ニ蘇山ノ印影ナシ支那漫遊ノ邦人彼地ニ於テ名品ニ遇フヲ喜ヒ價ノ貴キヲ厭ハス購ヒ得テ歸リ之ヲ君ニ示ス何ンソ圖ラン是君カ作品ニシテ曩キニ低價ヲ以テ商估ニ售リシモノナラントハ相見テ一笑セシコト一再ニシテ止ラス

○一日某支那人來リ宋窯酒盞ヲ携ヘ君ニ示シ且云ク將ニ東京ニ赴カントス一週日許ニシテ再ヒ問ハン請フ之ヲ鑒賞セヨト君直チニ同一物数個ヲ造リ某ノ來ルヲ竢ツ某果シテ至ル因リテ新古ヲ交ヘ数個ヲ連ネテ客ニ示シ請フ之ヲ識別セヨト而テ客竟ニ辨スル能ハサリシ

○李王職ノ聘ニ應シテ渡鮮スルヤ小宮次官其間ヲ周旋セラル君當時家ニ餘財ナシ然レトモ李王家ヨリ報酬ヲ受クルヲ屑トセス云ク余渡鮮セハ勅任官ノ待遇ハ之ヲ受ケンモ金員ノ報酬ハ敢テ受ケサルナリト依リテ昌德宮ノ傍ラ一殿内ニ起臥シ禮遇甚タ厚シ李王殿下ニ謁シ古美術ノ鑑賞ニ惟日モ足ラス全羅道方面廢窯ノ舊跡探査ノ如キ一行十数人隨行ス至レリト謂ツ可シ事畢リ辭シ去ルニ臨ミ物ヲ賜ヒ禮ヲ厚ウシ高麗燒ノ再興ヲ見ルニ至リタルヲ嘉セラレタリ往昔豐臣氏朝鮮征伐ノトキ陶工ヲ拉シ歸リ名ヲ鮮次郎ト改稱シ歸化セシタルコトニ想倒セハ君カ氣節ノ介然タルニ敬服セスンハアラス且我邦往古陶師ヲ彼国ニ聘セシニ今日彼レ君ヲ聘シテ千古廢絶ノ高麗窯ヲ再興シ得タルハ国運然ラシムルト云フト雖モ君カ超倫ノ技術ト古武士ノ典型タル氣節ト相竢ツテ此ニ至レル所以ンナリ

○君再ヒ渡鮮セントスルヤ細君病アリ實ヲ告クル能ハス旨ヲ嬢ニ語リ余ニ治ヲ託シテ家ヲ辭ス其志ヤ勵シク其情ヤ悲シ情ヲ以テ志ヲ變スル能ハサル固ヨリナルモ君能ク此間ノ措置ヲ誤ヲサリシナリ

○君曜變ニ於テ深ク研鑽シ白金ノ如キ將タ「イリチウム」ノ如キ貴金屬ヲ用キテ釉藥ト爲シ火熱ニ注意セリ星紋鼈甲等ノ曜變ハ千古ノ名品ヲ凌駕スルノミナラス大正十一年新年和歌御題旭光照波ニ因メル天目茶碗ノ如キ内面ニ放線状ヲ現ハシ底面ニ旭日ノ瞳朧タルヲ見ル又君カ重陽ト銘セシ菊花ノ寒葩冷蕋碗ノ内面ニ爛漫タルノ観アラシム又花鮒香爐等水中蘋藻間ニ紅魚ノ遊泳スルアリ魚眼白金ヲ用キ魚體ニ黄金ヲ用キタル等一ニ君ノ考案ノ愈出テ愈妙ナルモノナリ

蘇山の余技について「蘇山賸影」に「君ノ餘技」と題して次の文を載ている。

君 ノ 餘 技

○君会テ病アリ郷国金沢県立病院ニ入院スルコト数旬院長木村孝蔵氏ノ許可ヲ得テ一大竹筒ニ竹林七賢ノ圖ヲ彫刻セリ蓋シ名作ナリ時歳晩ニ屬シ嚢中空シ某素封家モ亦入院シテ已ニ之

ヲ知リ強テ購ヒ去ラル然モ之ニ仍リテ僅カニ入院料ヲ支辨セリト惜ム可キカナ

○君時辰儀ヲ製スルコト二三ニシテ止ラス其一ノ如キハ半年ヲ費ヤシ雷獸カ十二個連環ノ太鼓ヲ提クル置時計ナリ最モ精巧ヲ極ム君錦光山ニ在リ偶マ病アリ醫藥ノ資ニ乏セ或人一客ヲ伴ヒ來リ一見垂延割愛ヲ請フテ止マス且價ヲ問フ君モ亦之ヲ答フル能ハス或人窺カニ三指ヲ出シテ君ニ諷示ス君以爲ラク三十金ト乃チ客ニ答フ客喜テ購ヒ去レリ或人君ニ語リテ云ク三百金ノ意ナリシニ惜イカナト君聞テ一笑セリ此時辰儀後チ東京ノ某大家ノ手ニ移リ珍襲スト人アリ萬金ヲ以テ割讓ヲ望ムモ應スル色ナシト其作ノ精妙想フヘク君ノ寡慾亦大ニ賞讃スヘキナリ

○綴錦ハ世間ノ機織法ニ依レハ表裏アルヲ君ハ機械ヲ改良シ表裏同一ノモノヲ織出セリ

○ゆかた織近世敷物トシテ市場ニ販賣モラル之レ初メ君カ考案ニ依ルモノナリ

○郵便函近來街頭ニ設ケラルヽ圓柱形ニシテ投入口廻轉式ハ君カ明治十年前已ニ考案セラレシモノ近來漸ク其普及ヲ見ルニ至レリ

○玩具近年粗製「ゴム」（蒟蒻製）球並同刀形玩具世上ニ流布セラル是明治初年君印度地方ヘ他ノ目的ヲ以テ輸出スヘク製造セリ然レトモ熱帯地方ハ忽チ腐敗シ目的ヲ達スルヲ得スシテ東京ニ送還シタリシ此「ゴム」布ヲ利用シテ玩具ヲ製造シタルヲ濫觴トス

○漆器乾漆ノ千年以上ニ至ラサレハ生セサル古色ヲ即日出現セシムルコトヲ考案成功セリ曲輪堆朱堆黒螺鈿等皆人ノ賞撫スル所ナリ

○竹器花挿（竹筒）筆筒香筒等彫刻又ハ陶器（蝸牛貝類）ヲ貼用シ趣ヲ添ユ亦世ノ貴フ所タリ

○鐵器鐵瓶ハ君カ考案ニ依リ形甚タ雅ニシテ松風謖々聲室ニ満チ易其口ハ水切殊ニ宜シ

○銅器鋳金錬金ノ法ニ精シ印材ノ如キ最モ手腕ヲ見ル又後ニ述フル羅氏所蔵品ノ如キニ於テモ其妙ヲ知ルニ足ル

○靈芝ノ補足ニ妙ナリ長大ニシテ如意形ヲ作リ其眞タルヲ想ハシム

○笛内面ヲ漆塗スルコト外面ニ古色ヲ生セシムルコト妙ナリ内面ヲ塗ルハ聲調ニ大ナル関係アリ君吹笛ニ巧ミニ鳳鳴ヲ弄セルカ故ナリ

○朱壇細工茶棚硯筥盆等最モ精巧ニシテ雅致アリ

○彫刻前項記載ノ外自家佛龕ニ安置セル釋尊並十六羅漢等指大ノ佛像ハ刀法最モ遒勁ナリ

○羅振玉氏家ヲ挈ケテ來朝シ京都東山ニ住ス齎ス所ノ銅，漆，磁，磚，陶器中途上大ニ破損スルモノ多シ皆三代時代ノ珍器ナラサルハナシ而シテ各専業家ノ能ク補修スルモノナシ君見

テ以修ム可シト爲シ寝食ヲ忘レ各々舊形ヲ保チ銅漆ノ如キハ古色蒼然トシテ全ク補修ノ痕跡ヲ認メス羅氏大ニ喜ビ嘆稱措カス而シテ君ハ一金タモ報酬ヲ受ケス云ク是レ餘技ノミ況ンヤ古美術品ノ鋳造合金ノ法陶磁ノ實質等ヲ窺フヲ得タルヲ喜フト

○君圍碁，將棋ニ堪能ナリ然レトモ神經衰弱ノ傾キアリ自ラ之ヲ止ム棋局ノ目盛（烏絲欄）工妙ナルハ專業家ノ及ハサル所タリ

○君演劇ニ趣味アリ尤モ舞臺背景ノ改良ニ熱中セシコトアリ曾テ偶々尾上民蔵カ石川五右衛門ノ太鼓抜ケヲ演セントシ之ヲ君ニ謀ル君金沢ノ劇場ニ於テ一大太鼓ヲ作ラシメ而シテ自ラ胴内ニ紅白羽二重ニテ鷲ヲ造リ翼ヲ戢メテ民蔵ト共ニ潜匿セシメ之ヲ舞臺ニ出スヤ太鼓忽チ破ルレハ大鷲両翼ヲ張リ五右衛門ナル民蔵ハ之ニ騎リ場内ノ天井ニ翺翔ス此時観衆拍手喝采鳴動止マサリシ其翼ノ長實ニ二丈ナリ是其一例トス

○明治初年君東京ニ於テ某氏ノ宴席ニ列ス衆皆隱シ芸ヲ演ス順次君ニ及フ君無芸ヲ以テ固辭スレトモ聽レス是ニ於テ意ヲ決シ浄瑠璃，常盤津，長唄，端歌，横笛，三絃等聲調節ニ中リ絃音律ニ諧ヒ梁塵飛ヒ鳳凰鳴キ或ハ切ニ或ハ縹緲頗フル妙境ニ入リ一座驚倒ス殊ニ宴ニ侍スル柳橋ノ名妓唖然タリト君諸種ノ音楽ヲ学フニ於テモ常ニ師匠ノ右ニ出テンコトヲ期シ熱中セサルハナク君初メ兵式操練ニ喇叭ヲ吹奏シ音聲ノ鍛錬亦與カルモノナラン

○東京ニ住セシトキ箱根温泉ニ逗留シ尋テ京都ニ赴キタリ當時祇園ノ名花代千代ヲ聘シ舞姿歌聲絃音等ヲ見聞スルコト数日纒頭ヲ與ヘテ歸東ス是亦一代名妓ノ技芸ヲ参考スルノ意ニ外ナラス

○君酒ヲ飲マス而シテ瓢ヲ愛シ鑑識ニ富ミ大小無数ノ名瓢ヲ壁間ニ懸ケ磨瑩光澤ヲ放ツ日夕見テ自ラ娯ム

○君本來武術家ナルカ故ニ刀剣ヲ愛シ鍛冶ノ法ニ精通シ常ニ云ク殞石ハ最良ノ材ナリト廢刀令出テヽヨリ家ニ秋水ノ影ヲ留メス君自ラ戒謹スル所アレハナリ

○名僧智識ト交リ多ク晩年心機一轉閒雅ノ楽ヲ計リ時トシテ達磨ヲ畫キ花鳥ヲ描キ往々人ヲ驚カセリ（終）

○

余ハ君ノ病ヲ療スル医師トシテ又三十年來君ト親交アル友人トシテ自ラ揣ラス平生見聞スル所ヲ叙シタルノミ余ノ不文固ヨリ君ノ如キ芸術界ノ偉人ヲ状スルモノニアラス如是ハ世自ラ其人アリ余何ンソ敢テ當ラン

大正十一年歳在壬戌三月　　擇堂　木邨得善譔

結　　び

諏訪蘇山は二十三才にして始めて彩雲樓旭山に学び，陶工の道に入つた。陶工としては晩学である。併し蘇山は豊かな天分にめぐまれ，特に器用なことは驚くべきもので，その天禀の技能は陶磁器に於ける陶画や彫刻等に著われている。その他，絵画，漆芸，金工等，蘇山が趣味として製作したものでも，専門家の作を凌ぐ優れた作品をのこしている。

また，よき指導者を得たことは，蘇山が後年その芸術を大成する上に大きな影響を与えたことと思われる。

蘇山が師事した彩雲樓旭山とは，絵を高井二白に陶法を青木木米に学び彩雲堂梅閑と号して，極めて細緻な九谷の八郎風のものや，呉須赤絵風を能くすることで九谷焼の名工の一人として有名な任田屋徳右衛門の子徳次のことで，徳次は父に陶法を学び嘗て民山窯の着画をし，父譲りの細描の赤絵に巧みなことで有名である。また慶應年間には内海吉造等と共に卯辰山の藩窯に従事し，後これを自営に移し向山焼と称し，種々の雅品を作制した。その門下には蘇山をはじめ春名繁春等の名工を出し，指導者としても立派な人物で，蘇山がこの様な優れた指導者に師事することが出来たことは誠に幸いであつた。

よき師を得，豊かな天分を持つた蘇山は入門後はやくもその頭角をあらわした。そのような蘇山を師も如何に期待をかけ，また愛したかは，やがて蘇山が師の彩雲樓旭山の女婿になつたことでもよくわかる。諏訪家には現在も彩雲樓旭山の釉薬調合法の手控が保存されている。

なおまた，蘇山が大成する上に大きな力となつた才能の一つに，若年のころより理科，特に化学に非凡の頭脳を有していたことで，これが後年寝食を忘れた熱烈な研究と相俟つて種々陶法上の発明を成功させることとなつた。

ところで蘇山が製陶に従事していた約五十年間は大きく前後の二期に分けて観ることができる。すなわち前期は金沢在住時代で二十三才より四十九才までを云い，後期は京都在住時代で五十才より七十二才までを云う。

前期は専ら九谷焼と陶彫の置物等の製作及びその他の研究期間で，当時すでに蘇山の作つたものが，世に古九谷と誤り伝えられるのを見てもその技倆が如何に進んでいたかがわかる。

現在でも九谷焼で陶磁製置物が盛んに製作されているが，これは蘇山がこの期間に陶磁製

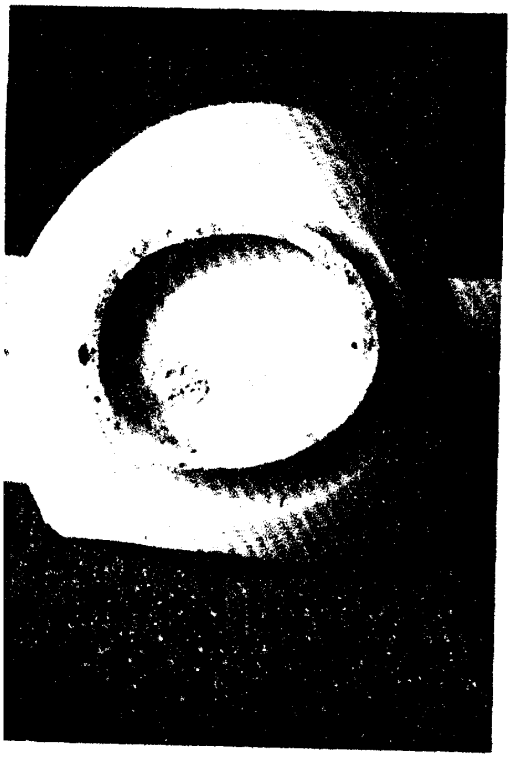
置物を多数製作し，また指導した為である。

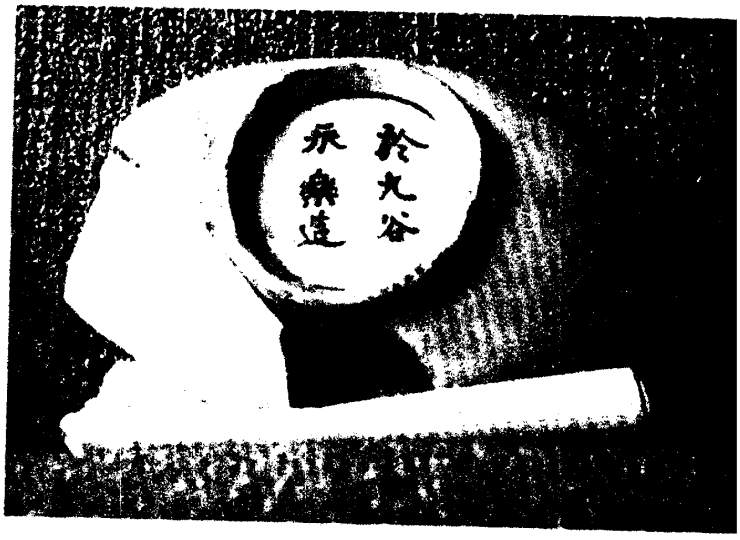
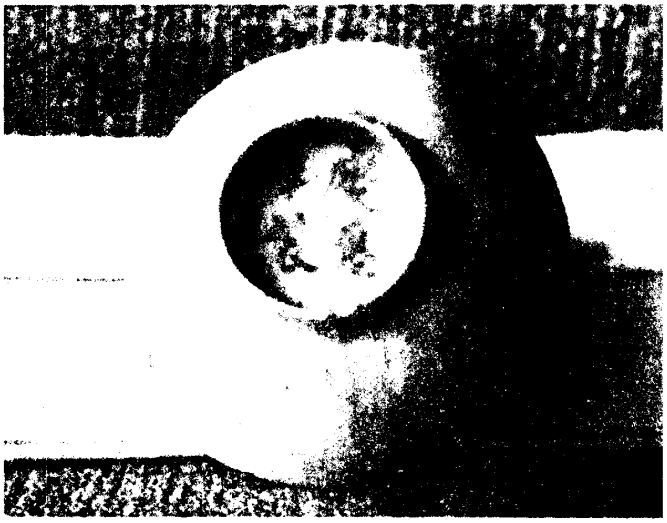
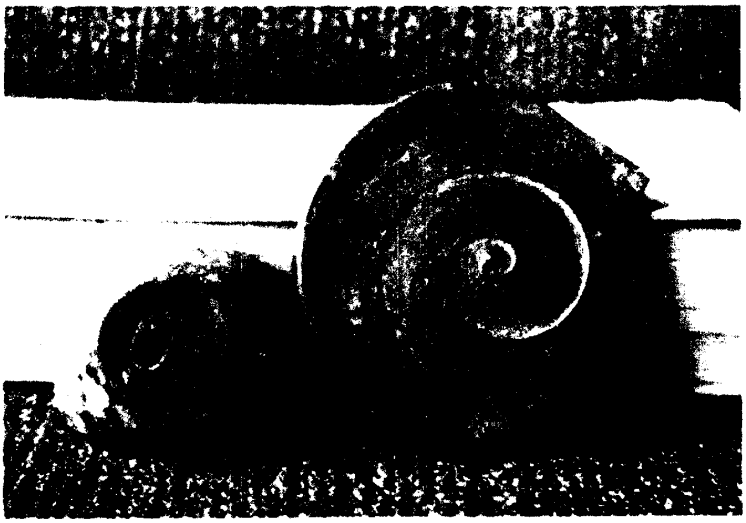
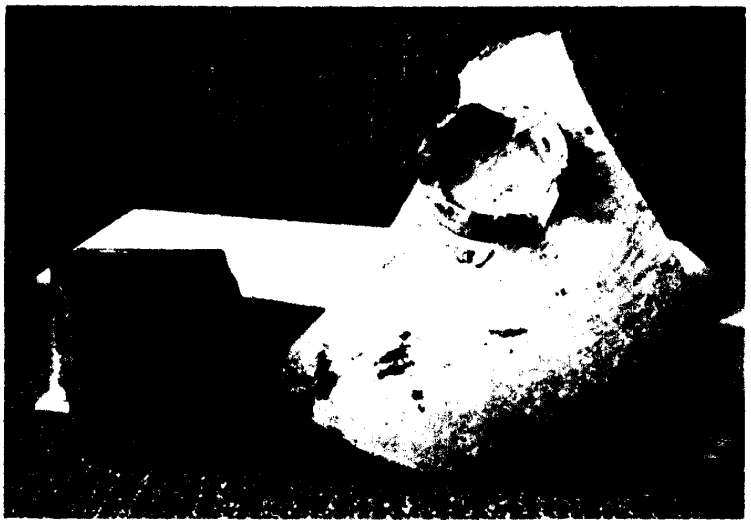
また，富山や福井県の窯業の指導改良に当つたり，石川県工業学校に教鞭をとるなど，この期間に九谷焼をはじめ郷土地方に尽した功績は誠に大きなものがあつた。

これより京都に住み後半期に入り研鑽益々努めその作風も大変化をなし，中国，朝鮮の古陶磁の研究等，その巾は多方面に渉り，特に七官青磁，交趾釉，白高麗白磁等の研究を以て漸く世に重きをなすにいたつた。

蘇山の芸術は古今の陶法を悉く研究してのち成つた晩成の大器とも称すべきもので，その形状色彩の典雅，技巧の高雅，誠に明治，大正期に於ける名工の一人と思われる。

附記　本稿は昭和四十二年度文部省科学研究費（各個研究）の報告である。




於九谷
赤樂造